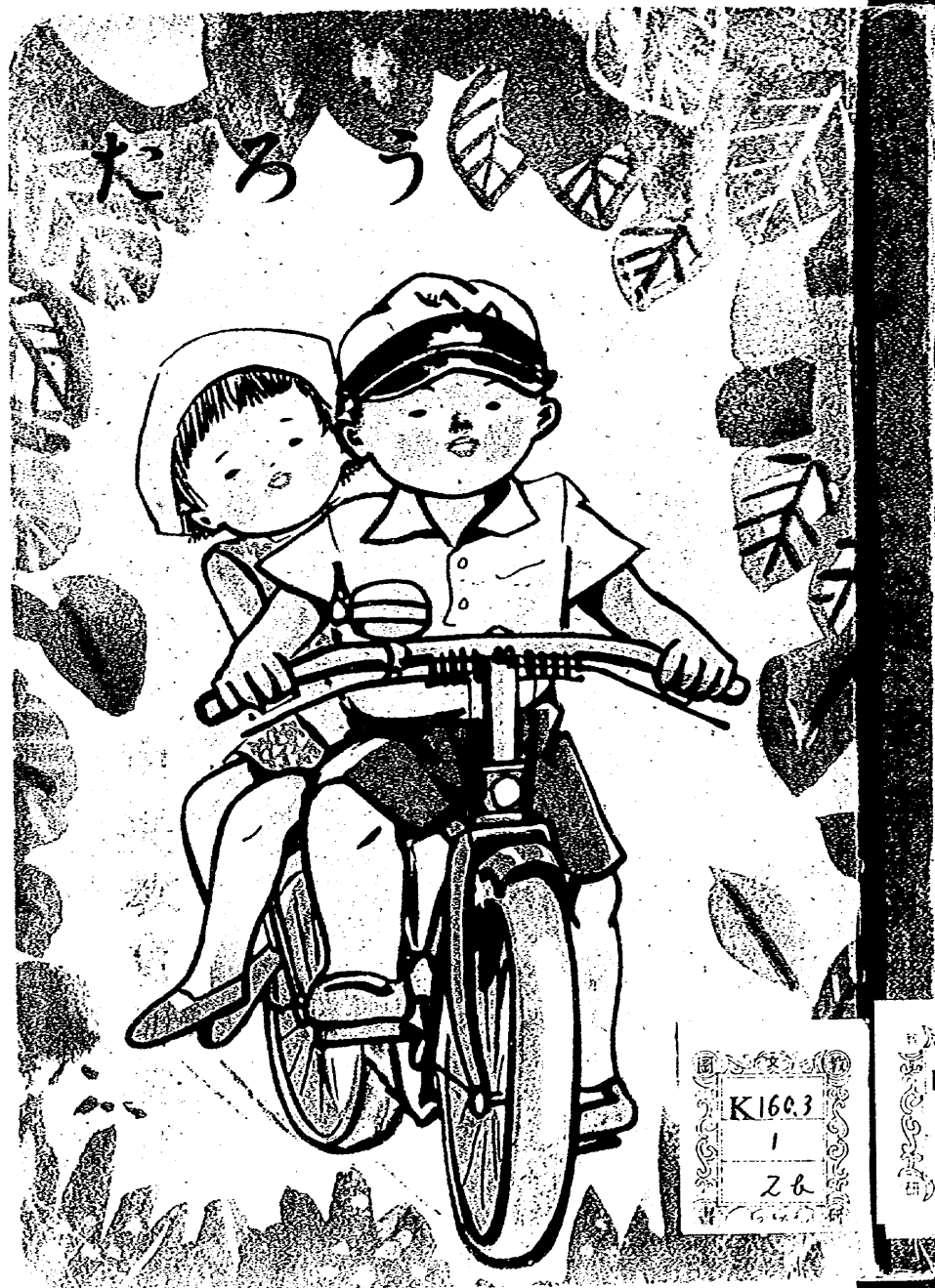


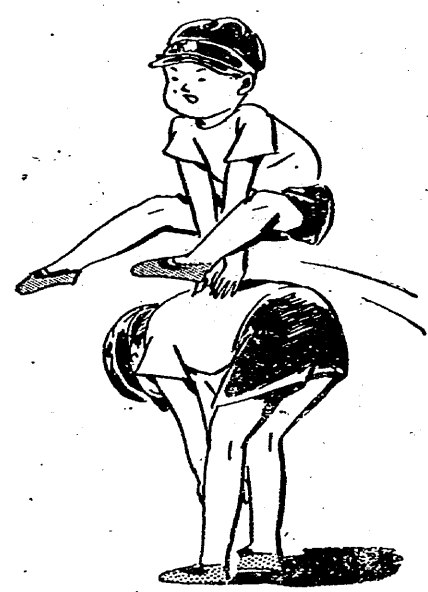


K160.3

1

2b

た る う



もくじ

一	町へ……………	二
二	ふみきりばん……………	二六
三	しんたいけんさ……………	四九
四	おるすばん……………	七一
五	はくぶつかん……………	九三
六	海への町で……………	一一七

一町へ

(一)

「まあ、たいへんな水だわ。」

みつこさんが、大きな声でさけびました。

「やあ、すごいいきおいてながれていくよ。」

よこから、としおくんものぞきこんで、いいました。

長いてつきようです。たろうくんたちの乗っている電車は、ちょ

うど、川のま上を走っていました。そくりよくをゆるめて、ゆっく

りわたっていきます。川は、にぎった水がゴーゴーと音をたてて、

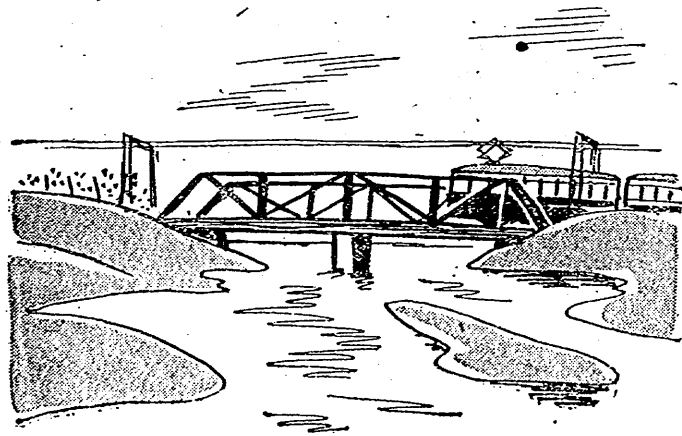
いまにもていぼうからあふれそうです。

乗っていた人たちも、まどから
水のいきおいをながめて、こうず
いのおそろしいことを話しあっ
ています。

「たいふうのために、川かみで大
雨があったので、こんなに水があ
えたのでしょ。」

「としちゃんのうちのほうは、だ
いじょうぶだったの。」

たろうくんが、としおくんにき
きました。



「うん。大雨のやんだばんがあぶなかった。村の人がそうて、どてを高くしたよ。おとうさんにもいさんも、どうとう朝まで帰らなかったし、ねえさんたちもねないで、おにぎりのたきだしをするし——」

「きみもみにいったの。」

「あぶないからいけないって。でも、うちのまえからみていたら、どての上が、たき火でまっかた



った。はんしょうが、ジャンジャンなったよ。

「まあ、こわいわねえ。」

もう町が近いらしく、まどからは、たてこんだ家々のやねがみえはじめました。

きゅうに、ゴーツと音がして、しばらくくらくらになりました。としおくんが、くびをちぢめています。

「ああ、おどろいた。いまのはなに。」

「あれはね、ガードを通ったんだよ。小さなトンネルさ。あの上が道になっているんだ。」

まもなく、電車はプラットホームにはいりました。おりるのは、これからみつつめの駅です。

(二)

たろうくんは、きょう、いなかからでてきたいとこのとしおくん
と、町へ本を買いにいくのです。大きな本屋のあるところは、町の
まんなかなので、きんじょに住んでいる、お友だちのみつこさんの
にいさんに、つれていっていただくことになりました。みつこさん
も、ぜひいきたいといつて、ついてきたのです。

たろうくんの家は、こうがいにあります。近くの駅から、電車で
原町というところまでいき、そこで市内電車に乗りかえるのが、い
ちばんべんりです。

やがて電車は、四人を乗せて、原町の駅につきました。

原町の駅は、じめんからはなれて、たいそう高いところにありま
した。それは、町のなかでは、人通りや車のゆききがはげしいので、
こうかせんといつて、電車が高いところを走っていたからです。

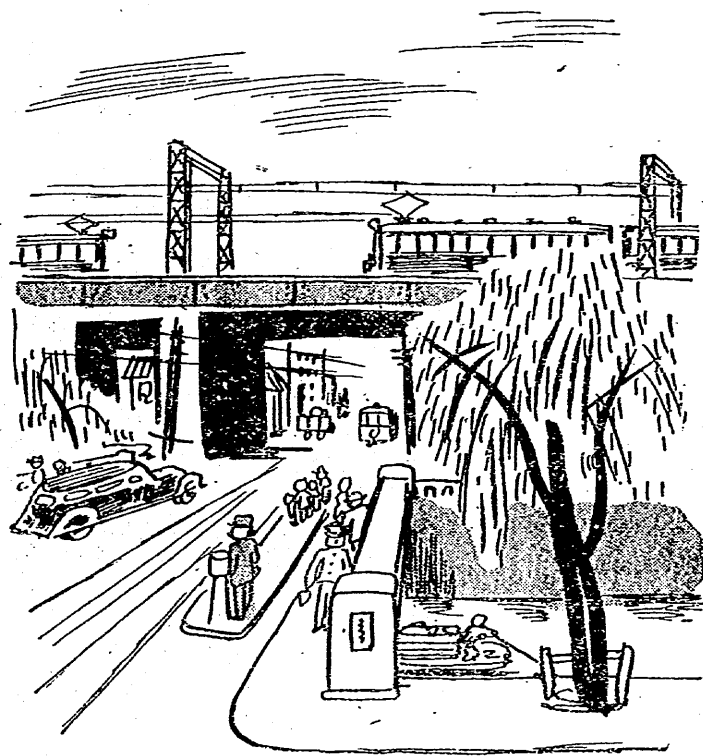
「長いかいだんをくだつて、やつと改札口へできました。市電の乗り
場へいこうとすると、あたまの上を、かみなりのような音をさせて、
電車が通りすぎました。」

「ずいぶん高いところを走っているんだなあ。くずれておちはしな
いかしら。」

「どたいがしっかりしているから、だいじょうぶだよ。」

「まるで、てっきょうの下にでもいるようだねえ。」

「としおくんは、地下鉄に乗ったことがありますか。」



このほりわりは、あまりふかないので、その下を地下鉄道が通っています。じめんの下をうまく使うと、べんりなうえに安全でもあります。そのため、近ごろでは、あさい川ばかりでなく、海のそこをほりぬいてトンネルをつくり、汽車や電車を走らせることもおこなわれています。

いままで、にこにこしながら、ふたりの話をきいていたにさんが、とおくんにたずねました。

「いいえ、まだありません。乗ってみたいなあ。」

「じゃあ、帰りには地下鉄に乗ろう。」

四人は、すこし高くなっている、ほそ長い安全ちたいの上で、ならんで市電をまわりました。よくはれた秋のごごです。ひこうきがーだい、きらきら光りながらとんでいます。

ちょうど、大きなほりわりにかけたはしの上だったので、小さな船が、水の上をゆつくりこいていくのもみえました。船は、材木をつんでいます。そのすぐあとから、ポンポンと音をたてながら、じょうき船がおいかけていきます。

「どうですか。地下鉄は、この川の下を通っているんですよ。」
にいさんが、としおくんにおしえています。

「びっくりしたわ。お船まであったのね。いったい、乗りものは、
いくつかさなつて通っているのでしょう。」

みつこさんは、目をくりくりさせて、ほっぺたをおさえました。
あかるい日の光にてらされて、なみきのいちじの葉が、うつく
しくかがやいています。

(三)

市電をおりると、にぎやかなこうさ点です。こうつうじゅんさが
まんながに立って、こうつうのせいりをしています。手をいきおい

よくふりあげて、ふえをならすと、とめられていた車や人が、いつ
せいに動きだします。ひとりでに、しんごうが青くなったり、赤く
なったりして、おまわりさんがいないときでも、しょうとつしない
ようになっています。

としおくんはめづらしいので、目をさらのようにしています。す
ぐまえを、青いバスがいきました。タクシーがつづいてきます。じ
てん車もたくさん通ります。うまをつけた荷車も、一だいやつてき
ました。みんな、赤いしんごうのときはとまります。

こしのまがったおばあさんも、小さなこどもに手をひかれて、ぶ
じにむこうがわへわたりました。道のはばは、たいそうひろくて、
アスファルトでたいらにつくってあります。人は、道のりようがわ



さえよくまもっていれば、
 けつしてあぶないめにはあ
 いません。たとえば、そら、
 よこぎるときは、この白い
 せんのないだをわたるん
 すよ。
 四人は、あたりによく氣を
 つけながら、おうだんほど
 をわたりました。
 この通りには、大きな本屋
 がたくさんならんでいます。



の人道じんどうをあるくのです。この
 道も、コンクリートでできて
 いるので、雨あがりでも、ら
 くにあるけます。
 「ここは、とくにぎやかな
 ところです。まるで川がな
 がれるように、車がつづい
 ていくでしょう。」
 にいさんは、としおくん
 せつめいしています。
 「しかし、こうつうのきそく

古本の店もあります。しばらくあ
るいてみて、いちばん大きな店に
はいりました。

本は、しゅるいによって、わけ
てならべてあります。たろうくん
たちのよむ本は、左のすみにあり
ました。

おもしろそうなのがあまりたく
さんあったので、きめるのにこま
りました。本をいためないように、
そつとひらいてえらびました。

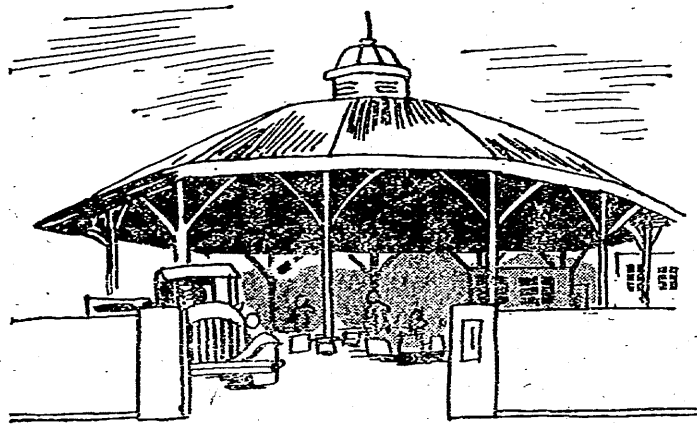


たろうくんとみつこさんは、一さつずつ、としおくんは、おみや
げもいれて、三さつ買いました。たろうくんのは、いろいろな乗り
もののお話です。表紙には、ケーブル・カーの絵が書いてありまし
た。

(四)

本屋の店をでると、いつのまにか、日がかげっていました。空に
は、だいぶん雲がでてきたようです。たろうくんたちは、りょうが
わの店をながめながら、すこし町をあるいてみました。

いろいろな店があります。ぼうし屋もくつ屋も、かなもの屋も、
かんぶつ屋もあります。とけいも賣っていますし、きれいなおもち



が、にっこりわらって、
「やあ、きょうはもうおわりまし
たよ。朝ぐれば、びっくりする
ほどたくさんありますよ。」
ちと、どなるようにいいました。
いきいてみると、朝は、たくさん
荷物がいるので、それこそ、目の
青まわるようなそがしさだそうで
す。トラックやリヤカーや荷車で、
いなかからはこんでくるやさしい
を、ここからどん町にだして

やも賣っています。ほしいものは、なんでもありそうな氣がします。
としおくんは、店のかんばんに氣をとられて、もうすこしてポス
トにぶつかるところでした。
ゆうびんきょくもあります。ぎんこうもあります。えいがかんの
まえには、人がたくさんいました。遠くにみえる大きなたてものは
大学だ、とにいきんがおしえてくれました。
ゆうびんきょくのうらに、まるやねの、大きなたてものがみえま
す。いってみると、大きな青物いちばでした。なかては、男の人が
三、四人、元氣よくはたらいしています。なかなか、そがしそうです。
「まあ、大きなかぼちゃだわ。」
みつこさんが、大声をだしました。すると、近くにいたわかい人

やります。町のやお屋が、あとからあとからやってきて、つぎつぎにやさいを受けとっていきます。それが、みんなのおうちのだいどころに、まわっていくのです。

このいちばは、すぐ近くに鉄道の駅があるので、遠くからはこばれてくるやさいやくだものを受けとるのにも、たいそうべんりです。遠くからくるやさいは、たいてい、まえの日のうちにとどきます。『ぼくの村のやさいも、やっぱりこんなところまでくるのかなあ。』としおくんは、大発見をしたといったかおつきで、なんともそっくりいいました。

『そうですよ。やさいだけじゃありません。さかなだって、やはり、鉄道ではこばれて、魚いちばにあつまります。さかな屋さんはい

そこへどりにいくんですよ。』

『わたし、魚いちばにもいってみたいわ。でも、きょうは、もうおそいわね。』

たろぅくんたちは、もっと町をみてあるきたかったのですが、おつとめの人たちが帰る時間になると、乗りものがたいへんこむので、いそいで電車に乗ることにしました。

『おや、じんりき車がきた。』

『うん。町でも、このごろまたふえてきたよ。ぼくも、このあいだ、乗せてもらった。』

『まあ、あれ、オートバイでしょう。にぎやかなところだと、なんだかぶつかりそうで、あぶないわね。』

「あんなところで、あそんでいる子
 がいる。あぶないなあ。」
 でも、ほかにあそび場がないのよ、
 きつと。
 だって、きのうのラジオでもいっ
 てたよ。道であそんで、けがをす
 る子がふえたって。」
 「そうね。ああ、そうだね。学校が
 いいわ。学校の運動場であそんだ
 ら、それに、こうえんだっていい
 と思うわ。この近くに、こうえん



はないのかしら。
 「としちゃんのほうはいいね。あぶなくなってる。
 」そのかわり、とんぼをおいかけて、いけや川におっこちる。ぼく、
 このまえ、せみとりをしていて、みぞにおちちゃった。もうすこ
 してとれるところだったのに。町にはせみがないね。
 「このへんでも、こうえんなかにはいるって話よ。」

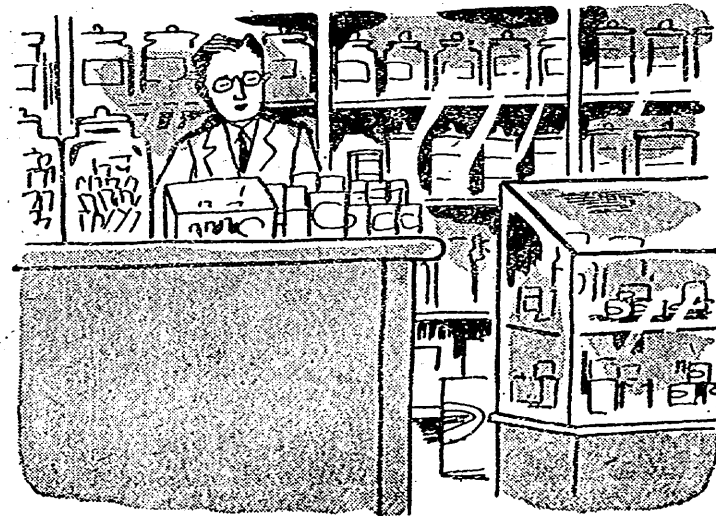
(五)

地下鉄の入口にある店で、にいはさんは、はブラシを買いました。
 みつこさんも、氣にいったのをえらんで、ひとつ買ってもらいまし
 た。

「おかあさんのもの、いたんでいたわ。まあ、これが、じょうぶそうでいいわ。おかあさん、この色きつとおすきよ。」

おかあさんに買ったのはブラシは、すきとおった水色のえに、まっ白な毛がついていました。みつこさんは、おみやげができたので、といです。

この店には、くすりも賣っています。店のながが、よくせいとん



されていて、せいけつな感じがします。たろうくんは、おとなりのおじさんが、いつものんでいるくすりのびんど、おなじのをみつけました。

きつぷを買って、かいだんをおりました。あかるい電とうが、たくさんついています。プラットホームでは、小さなたいの上で、新聞やざつしを賣っています。ちょうど、にいさんくらの男の子でした。

白い矢じるしのあるところで、二列にならんでまちました。このあたまの上を、電車や自動車走ったり、川がながれていたりするのだ、と思うとゆかいです。せんろのむこうをのぞいてみたら、まっくらで、遠くに、ぼつんとあかりがみえました。



「つかれたかい。だいぶあるいたからね。」
 にいさんが、わらいながらいいました。
 「ぼく、もつとみてあるきたいくらいだ。」
 「わたし、ちつともくたびれないわ。」
 みつこさんは、また目をくりくりさせて、小さなからだで、りきみました。

遠くの方から コトコトとレールのなる音が、つたわってきます。
 やがて、その音が大きくなると、ゴーツというひびきがして、電車がはいってきました。三だいいんけつです。
 戸があくと、人がどつどおりてきました。まっていた人たちも、じゅんじょよく乗りこみます。
 「ピーッ」するすると動きだしました。ざせきがなかったので、四人は、まどのところに立ちました。
 トネルのくらかへの、ところどころにともっている小さなあかりが、矢のようにすぎていきます。

二 ふみきりばん

(一)

たろうくんの家と学校とのあいだには、ふみきりがひとつあります。電車のふみきりです。しかし、汽車も、ときどき通ります。

汽車の通るのはめずらしいので、小さな子どもたちは、たいていかけてきて、一だい二だいと、かぞえながらみています。

いちばんさきに、黒いきかん車が、シュツシュツとじょうきををはきながら、いきおいよく通りすぎます。ふみきりのてまえにくると、いきなり、するどいきてきをならします。

「ピーツ。うんてんしゅが、まどからくびをだしているのがみえま

す。

「ゴトンゴトンゴトン、カタンカタン。」

じひびきをさせながら、きやく車がなんだいもつながって、通りすぎます。ゆうびん車のついていることもあります。

「おうい、かもつ列車がきたようっ。」

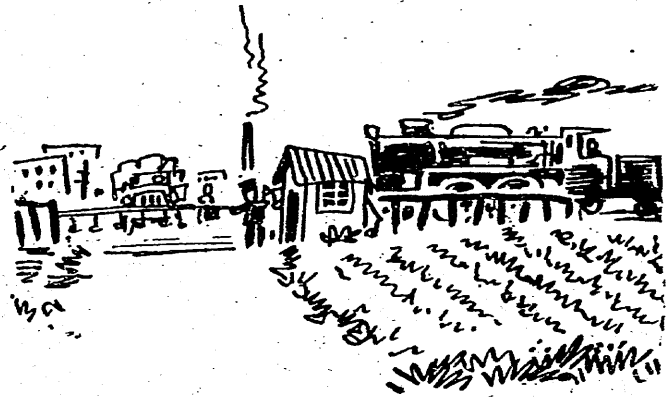
だれかが大声でさけぶと、みんないっせいにかけたします。

かもつ列車は、ゆっくり走っていきます。大きな車や小さな車が、なん十だいもつづいています。やねのあるのも、ないのもあります。

「きょうは、材木ばかりか。」

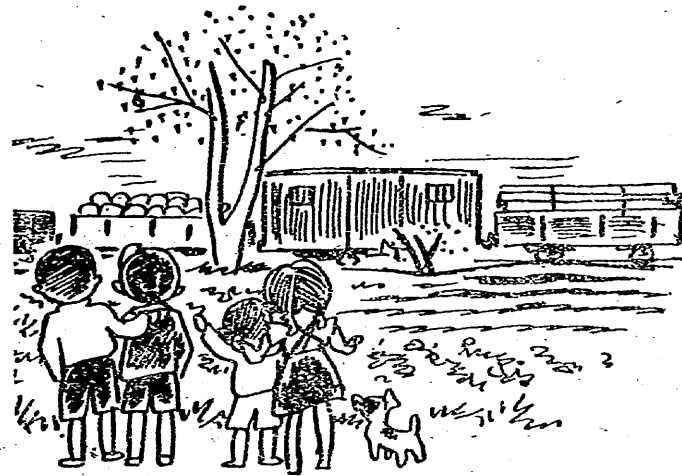
「おとといのには、石炭がつんであったよ。」

「町からいくのには、なにをつむのかなあ。」



たらうくんは、ふみきりばんのお
 じいさんとなかよしでした。学校へ
 かよいはじめてからいままで、学校
 へてゐる日はいつでも、このおじいさ
 んのお話をみないときはありません。
 「おじいさん、おはよう。」
 朝、たらうくんがあいさつすると、
 おじいさんは、にこにこして手をふ
 ってくれます。

(二)



「そりゃあ、きものだって本だって、
 いろんなたべものだって、いなか
 になんないものはなんでもさ。」
 「おひやくしゅうさんの使うどうぐ
 やきかいも、それから、たんぼや
 はたけにいれるひりょうも、みん
 な汽車ではこぶんだわ。」
 「そのかわり、いなかからお米がく
 るのねえ。」
 まいにちまいにち、かもつ列車を
 みるのはたのしみです。

もう、ずいぶんの年になるのでしょう。おじいさんは、やせていて、せいが高く、すこしこしがまがっています。かおは、じょうぶそうに日にやけていますが、あごのおひげは、もう白くなっています。

「えいやらさつ。——はい。」

おじいさんは、いつもこんなかけ声で、しゃだんきをあげます。どんなあつい日でも、どんなさむい夜でも、このおじいさんのかけ声ど、しごとぶりには、すこしもかわりがありません。ここえるような、つめたい風のふく朝にも、あたりのみえなくなるような大雨のばんにも、つるつるにはげた古がいのえりを立てたおじいさんは、おそろしいじこがおこらないようにと、ひとりぼっちで、

ふみきりをまもっています。

「雨が降ったばんはあぶないからなあ。つい四、五日まえにも、

この近くで、じてん車がはねられたよ。」

小さなこやのいたじきにこしをおろして、きせるをポンとたたきながら、おじいさんは、たろろくに話しかけたりします。おじいさんは、たいそう話ずきです。

「ねえ、おじいさん。そこには、」



ふみきりばんの人いなかったの。

「うん、夜なかだったからなあ。もう、うちへ帰ったあだったんだ。小さいふみきりだと、ひるまでもばんにんがいなから、よく氣をつけて通るんだよ。」

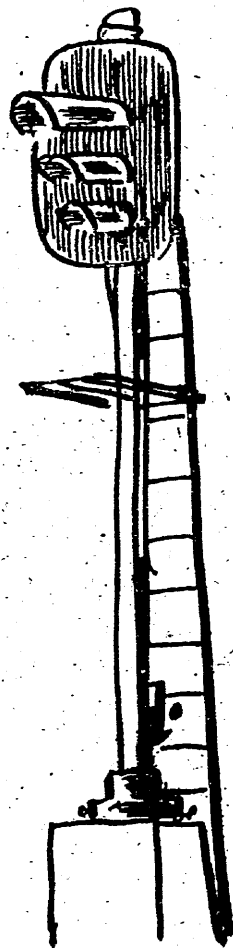
あぶないのは、もやがいつぱいで、遠くがみえないときだ。それに、電車がすれちがうときもいけない。ひとつが通りすぎたからって、むやみにとびだすといへんことになる。いいかい、しやだんきがしっかりとあがってからあるくんだよ。

おじいさんは、こんなふうに、ていねいにおしえてくれます。お話がおもしろいので、たろくんたちは、ときどき道くさをしてしまったりします。

「ジーツ、ジーツ、ジーツ。」

そんなとき、いきなり、あたまの上で、けいほうきがなりたすことがあります。すると、おじいさんは、すばやく立ちあがって、

「むかしは、こんなべんりなものはなかったよ。これは、電車が五、六百メートルもむこうにいますときから、ジージーなってくれる。だが、けいほうきだって、こしょうしないとはかぎらないからね。ゆだんたいてき、ゆだんたいてき。」



けいほうき

おもしろそうに、手をポンポンたたきながら、こういうと、もうしゃだんきに手をかけて、電車のくる方をにらんでいるのです。このふみきりは、とくに人通りが多いので、しゃだんきのほかに、けいほうきまであるのだそうです。

(三)

たろうくんが学校へいく道で、きけんな場所といえは、ふみきりのほかには、小川の木ばしと、学校のおもて通りぐらいてしよう。この通りは、むかしのかいどうになっていて、ずっと古くから、旅をする人のあるいた道です。いまは、やさいをいっぱいつんだトラックが、すなほこりをあげながら、通っていきます。



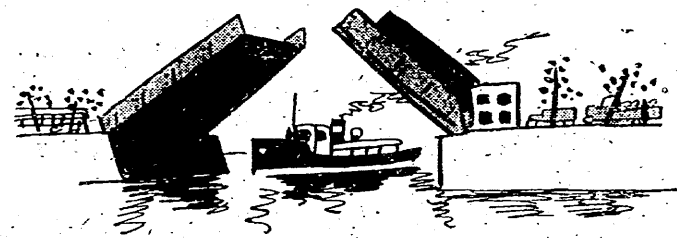
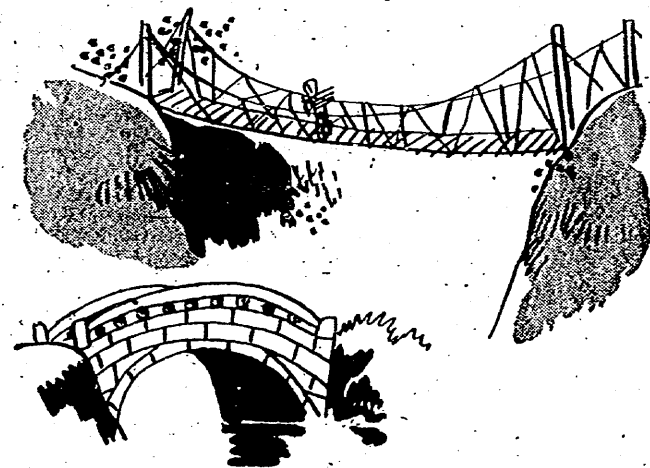
むかしのかいどう

ちかごろの道としては、それほど大きくはないのですが、むかしは、きつとりっぱだったのでしょう。じてん車や荷車なども多いので、朝、学校のはじまるじこくには、六年生がかわりあって、せいをしています。

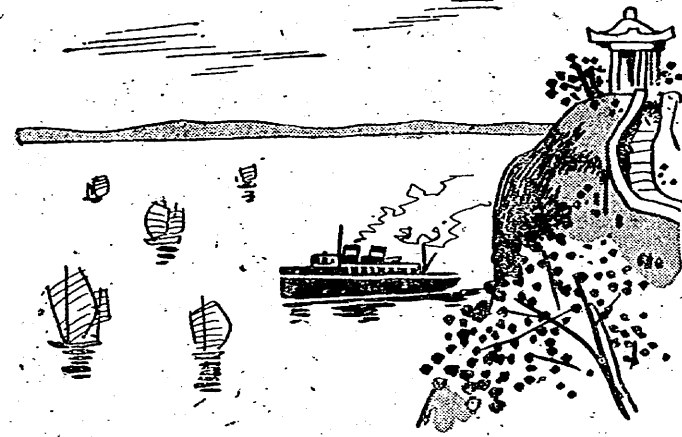
小川のはしは、近いうちに、あたらしい、じょうぶなのがかかるそうです。いまあるのでは、おもい荷をつんだ自動車は、あぶない

ということですよ。木でできた、古い小さな橋ですが、もしこの橋がなかったら、どんなにふべんなことでしょう。このまえ、はしがいたんで、わたれなくなったとき、たろうくんたちは、ずいぶん遠くをまわらなければなりません。でした。

となりのおじさんの話では、はしにも、いろいろなものがあるということです。かんたんなまるき



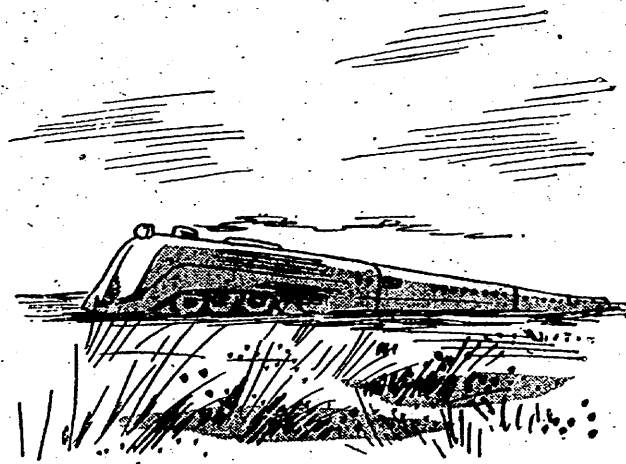
ばしもある、ゆらゆらゆれるつりばしもあります。てっきょうのように、たいらなものもある、たいこばしのように、まるくそつたものもあります。なかには、船の通るとき、われてふたつにひらく、めずらしいはしもあります。むかしは、東海道の大井川など、はしがないので、にんぶが、かごのようなものをついて、わたしたりしました。いまでも、中国の



揚子江のように、はしをかけるこ
 とのできないほど、はばのひろい
 川は、船を使ってわたります。
 そのような大きな川では、汽船
 江も、じゅうぶん通ることができ
 子のです。日本には、大きな船がさ
 揚かのぼることのできるような川は
 ありません。しかし、あまり大き
 くない船なら、むかしから、べん
 りな乗りものとして、川をゆきき
 していました。

船は、汽車や電車にくらべれば、
 そくりよくが小さいのですが、お
 もいものがたくさんつめますし、
 また水の上には、りくのように、
 人やまものがないのでべんりです。

満州にいくと、どこまでもどこ
 までも、みわたすかぎり、ひろ
 い野原だ。汽車は、そのまんな
 かを、まっすぐに走っている。
 だから、そくりよくもでるし、
 ゆれたりすることも、すくなくてすむ。



外国の鉄道

も、日本のよりひろいのだね。

おじさんは、そういつて、外國の鐵道の写真をみせてくれました。トンネルをくぐったり、谷をわたったり、日本の鐵道は、ずいぶんおもしろい旅をさせてくれますが、そのかわり、そんな場所にせんろをしくためには、たいした苦勞があつたわけです。

(四)

みつこさんのおとうさんは、むかし、外國がよいの船の船長をしていらつしました。だから、おうちには、外國のいろいろな土地の絵や写真が、どつさりあります。船のもけいも、かざつてあります。おとうさんの船がよる外國のみなどに、にいさんがひとつひ

とつしるしをつけた、大きな世界ちずも、かべにはつてあります。

たろうくんは、みつこさんの家へあそびにいくと、いつも写真ちようやちずをみました。おかあさんやにいさんにきいて、この絵はどここの絵だろうかと、その土地の名をちずてしらべてみることもあります。おまつりの絵はがきなどには、たいへんおもしろいのがありました。かおのいろも、きているものも、住んでいる家も、たろうくんたちのとは、すっかりちがっていましたが、たいこをたたいたり、おどりをおどったりして、たいそうたのしそうです。

「やあ、こんなにあつい毛がわのかいとうだよ。」

「まあ、大雪じゃないの。ずいぶんさむい國のおまつりね。」

「動物の毛がわをきるなんて、おもしろいなあ。」

「おとうさんも、もってるわ。さ
むい土地では、みんなきるんて
すって。」

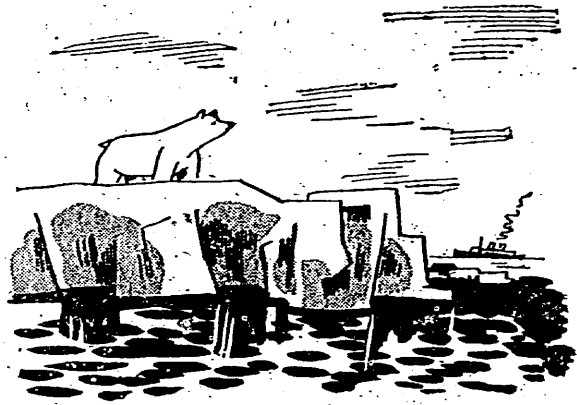
「そうだ。いつか、となりのおじ
さんもそういつてたよ。れいか
なん十どとなると、どうしても
毛がわがいらんだって。」

「ほっきよくは、さむいでしやう
ねえ。どんな家に住んでるのか
しら。」

「ほっきよくには、りくはないよ。」



寒い国のおまつり



人も住んでいないって。ぼく、この
あいだ、おじさんにきいた。なん
きよくには、りくがあるんだよ。
なんきよくは、あついだろうなあ。
「まあ、たろうさん。なんきよくも
さむいのよ。こおりでいっぱいな
のよ。わたし、知ってるわ。写真
があつたわ。」
「だって、南じゃないか。北はさむ

くて、南はあついよ。どうして、南がさむいんだい。
「わけはわからないわ。でも、たしかにさむいのよ。にいさんにき

んなに岩ばかりのはなれ島
なんてすもの。こどももい
るかしら。

「ゆだんをして、あかりをつ
けわすれたらたいへんだね。
光がみえなかったら、いち
だいじよ。船が岩にのりあ
げてしまうわ。なんせんよ。」
どうだいをまもる、どうだ
いもりのやくめは、世の中の
人たちにも、あまり知られな



いで、まいにちせまいところから、海ばかりながめている、めだた
ぬしごとです。そのうえ、かわったものをたべたり、おもしろいも
のをみたりするというたのしみも、すくないのです。しかし、もし
どうだいもりがいなかったら、そして、きそく^{きそく}正しくあかりをとも
してくれなかったら、どれだけたくさんの人がこまることでしょう。
どんなに大きな汽船をつくっても、安心してこうかいをすることは
できないでしょう。

たろうくんは、ふみきりばんのおじいさんのことを考えました。
そして、汽車や汽船や、電車や自動車や、いろいろな乗りもののこ
とを考えました。

日本の國でつくれないものは、遠い外國からはこんでもらわなけ

ればなりません。しかしそのかわり、日本でたくさんつくれるものは、外國へ送ります。それは、みんな汽船にのせるのです。

日本の國のなかでは、汽車や電車や自動車などではこびます。うしやうまをつけて、荷車ではこぶこともあります。

しかし、このような乗りものには、それをつくる人たちや、動かす人たちや、しょうとつしたりしないように、いろいろなもちばをもっている人たちがあります。ふみきりばん、どうだいもり、こうつうせいのりのおまわりさん、みんないっしょうけんめいに、自分のもちばをもっています。たろうくんやみつこさんは、いったい、どんなもちばをもっているでしょうか。

三 しんたいけんさ

(一)

きょうも	たのしく	がっこうへ、
みんな	そろって	でかけます。
ひばり	ないてる	おおぞらに、
おひさま	ぽかぽか	てってます。
カンカン	かじやの	おじさんは、
あさから	おせいが	てることね。
からの	にばしやを	ひいてくる。
くろい	おうまも	おはようよ。

みちを　　よちよち　　あるいてる

めんどりさんも　　おはようよ。

きょうも　　たのしく　　がっこうへ、

みんな　　そろって　　でかけます。

うつくしい秋の朝です。たろうくんは、うたをうたいながら、学校へいくとちゅうです。みつこさんとひでおくんがいつしよです。

たんぼのなかのほそい道をいくと、近道になります。もう、いねをかった田もあります。いねのほが、おもくたれさがっている田のまんなかに、ぼうしをかぶった、かかしが立っています。

かかし、かかし、一本足のかかし、
おかげで、ことしも、ぼうさくた。

ひでおくんが、大声でうたいました。かかしも、長いあいだ、雨や風にさらされて、くたびれてるようです。

あつかったり、さむかったり、
雨が降らなかつたり、降りすぎたり、大風もふくし、虫もつくし、そのうえ、すずめをおいはらうのでは、おひゃくしょうさんのしんぱいも、たえるときがないなあ。



たらうくんは、いつかおじさんたちが話していたのを思い出しました。

「あら、山村先生だわ。」

みつこさんが、すばやくみつめました。きょうはまだ、白いきものはきていませんが、むこうの火のみやぐらの下をいそいでいくのは、たしかに、えいせいがかりの山村先生です。みつこさんは、このはるごろまでは、よくかぜをひいたりしましたから、ずいぶんご心配をかけました。みつこさんは、山村先生がだいすきです。

「やあ、きょうは、しんたいけんさだよ。まえの週に、先生がそういつてたよ。」

ひておくんは、びよんびよんとびあがって、たのしそうにあるき

ます。

「うん、こんどは、うんとふえてるぞ。せいだって、たいじゅうだつて。みっちゃんのはびないなあ。」

「まあ、ひどい。わたしだつてのびたわ。これでも、一メートル二十センチあつてよ。」

ひておくんは、もう、ずっとさきへいって、手をふってわらっています。

「やあい。ふたりでなにいつてるんだよう。先生においつこうよう。」
たらうくんとみつこさんは、きょうそうでかけだしました。ひておくんも走っています。

(二)

運動場は、もうこどもたちでいっぱいです。学校に近づくと、みんなのさわぐ声が、波の音のように、おしよせてきます。

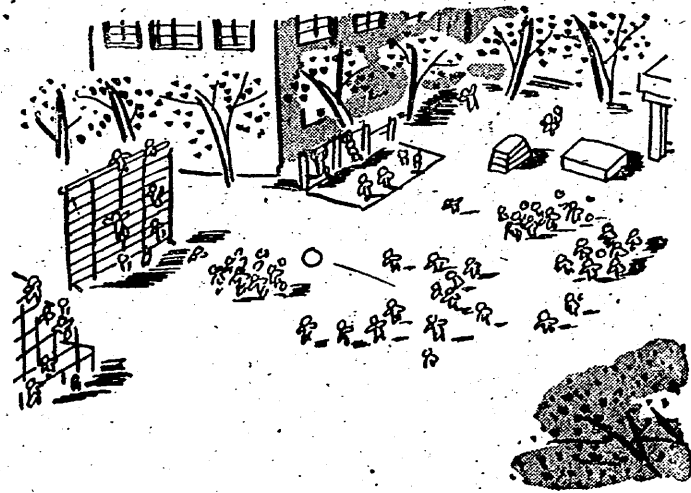
男の子は、まりなげをしています。おにごっこや、かけっこもしています。女の子は、なわとびやまりつきをしています。

たろうくんもひでおくんは、テニスコートのよこの、けやきの下へいって、やきゅうのながまにはいりました。たろうくんはせめる組、ひでおくんはまもる組です。

たろうくんの学級では、やきゅうがたいそうさかんです。しかし、はじめのうちはまだ、きそくをよく知らないものが多かったのて、

なかなかうまくあそべませんでした。あそびでも、きそくがはつきりしていて、それがしつかりとまもられなくては、たのしくやることができません。

そこで、みんながそうだんして、六年生の人におしえてもらいました。六年生は、しんせつに、きそくややりかたをせつめいしたうえ、けがをふせぐためのちゅういまでしてくれました。休み時間の運動



場では、ことに人が多いので、氣をつけていないと、けがをします。

みつこさんたちは、ろくぼくのうらで、なわとびをしています。

学級で、早くくる人のおは、たいていみえるようです。

みつちゃん、おはよう。あいかわらず、おねぼうね。

もう、かねがなるかしら。

「まだすこしあるわ。早くおはいりなさい。」

「かつこさん、きょうは、とてもよくとべるわね。」

かつこさんというのは、りんごのように赤いほつぺたをした、青リボンの子です。

「このあいだはいった水野さん、ちつともこないわねえ。このあそび場、知らないんじゃない。」

「きつとそうよ。なれないから、わからないのよ。さびしそうだったわ。」

「つれてきて、きょうから、いっしょにあそびましょうよ。——きつ

と、水のみ場のへんにいるわ。さがしにいかない。」

みつこさんは、なかまの二、三人と、水野さんをさがしにいきました。

運動場には、いよいよ人がふえてきたようです。

(三)

「カーン、カーン、カーン。」

かねがなって、じゅぎょうがはじまります。いちばんはじめの時

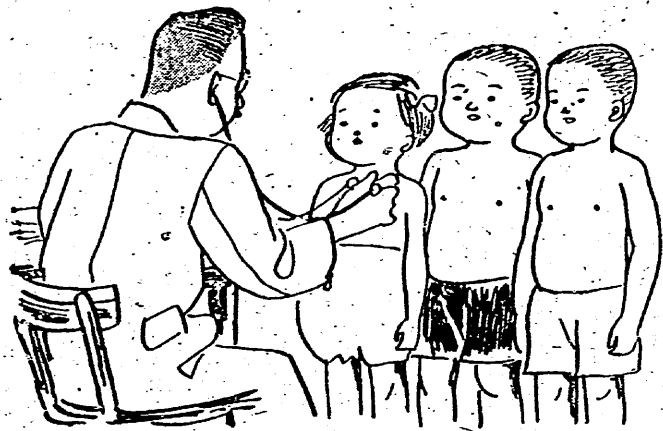
間の「こくご」がおわったら、やはり、しんたいけんぎがありました。
えいせい室の長いこしかけの上に、みんなおとなしくこしをかけ
ています。うけもちの先生と山村先生が、ひとりひとりの名まえの
書いてある紙を、そろえていらっしやいます。

「やあ、みんな、しずかにまっっているなあ。」

「にこにこわらいながら、おひげのおいしゃさんが、はいつてこら
れました。」

「さあ、じゅんばんに、きものをぬぐんですよ。」

先生のさしずで、つきつきにはかっでもらいます。せいの高さ、
からだのおもさ、それから、むねのまわりです。書きこまれた紙を
みると、グラフの表ができていて、まいつき、どれだけふえている



か、すぐわかるようになっていまし
た。たろうくんたちが、このあいだ
から、自分たちでつくっているのと、
よくにっています。

おいしゃさんのまえにいくと、い
ろいろとやさしい声できかれました。
先生がたも、よごから、いろいろせ
つめいをなさいます。とくにやわい
子は、あとでもういちど、ゆっくり
みていただくことになりました。
どうとう、みつこさんのばんが、

まわってきました。

「大山さんだね。このごろは、もうかぜをひかない。それはよかった。どうれ、口をあけて。うん、なかなかよく、はをみがいてい

る。よしよし、こんどは、したをだしてごらん。」
おいしゃさんは、書きいれた紙と、みんなのかおとをみくらべながら、ていねいにみてくださいます。

「うん、村山くん。きみは、すこしかお色がわるいな。元気がないぞ。おかあさんのつくってくださるものは、なんでもたべているかな。たべないものもある。それ、それがいけないな。」
「おやおや、川田くんには、虫がいるようだ。ほかの人のおなかも、あやしかったようだな。きょうは、ぜひ、まぐりをのんでもらう

ことにしよう。

目のけんさもありました。きたないゆびで目をいじったりしていると、目に病氣がうつります。目の病氣はよくうつるので、おいしゃさんも、一かいごとに、手をしようどくしていらっしやいました。

(四)

おひるべんとうをたべるまえに、まぐり(海人草)というものをのみました。これは、海草からとったおくすりだそうです。ちよっと、においのある、お茶のようなものでした。

「まだのまない人はありませんか。」

先生が、ゆのみに、茶いろの水をついでいらっしやいます。

「やあい、ひておくん。まだ、もってあるいてるのかい。目をつぶって、のんでしまえよ。」

「わたし、もうのんだわ。」

「ぼく、そんなにきらいじゃないよ。」

「ちょっと、にがいね。」



みんな、がやがやさわいでいます。

まくりをのむと、おなかのなかにいる、かいちゅうという虫がよわって、からだからでてしまうのだそうです。せつかく、おいしい、じょうのあるものをたべても、おなかの虫に

たべられてしまうのでは、なんにもなりません。それに、わるいことには、自分では、なかなか虫のいることがわからないので、おとなでもこどもでも、へいきでいることが多いのです。いまの日本では、この虫のいない人はすくない、といつてもよいほどだそうです。

ごこの時間は、おなかの虫の話で、もちきりでした。

「どんな虫だろう。きもちがわるいね。」

「ながあい、大きな虫だってさ。」

「そんな長い虫が、よくおなかにいるものだなあ。」

「きみは知らないね。にんげんのちょうは、とても長いんだぜ。」

「まくりをのまないでも、虫をなくせないものかなあ。」



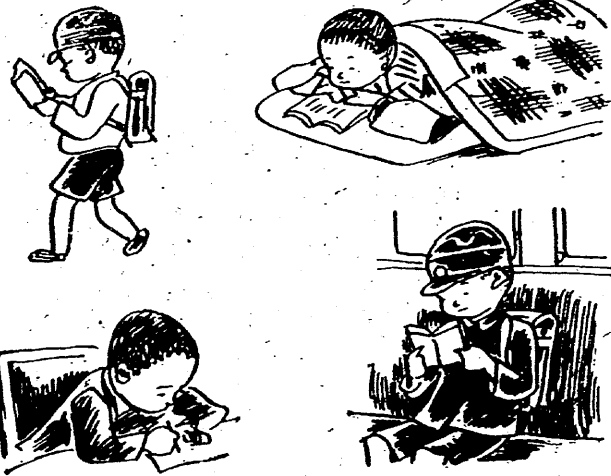
かいちゅう

ひでおくんは、よほど、まくりがきらいのようです。
 「そりゃあ、たべものをよくにればいいんだよ。でも、なかなかそ
 うはいかないからねえ。おつけものだってあるしー。うん、やさ
 いの葉をよくあらうのも、いいことだね。」
 たらうくんは、このあいだ、おじさんにおしえてもらったので、
 よく知っています。

女の子たちは、目のことを話しています。山村先生のお話では、
 日本人には、めがねをかけているものが多い、ということですよ。

「うちのねえさんたち、ふたりとも、めがねかけているの。わたし、
 いやだわ、目をわるくするの。」

「くらいところで、本をよんだりしなければいいんでしよう。」



「電車のなかでよんだり、ある

きながらよんだりするのも、

わるいのよ。ねてよむのも、

いけないのよ。」

「うちのねえさんは、空や海を

みていたわ。ずっと遠くのもい

のを、じつとみているのもい

いんですって。」

「いちど目をわるくすると、な

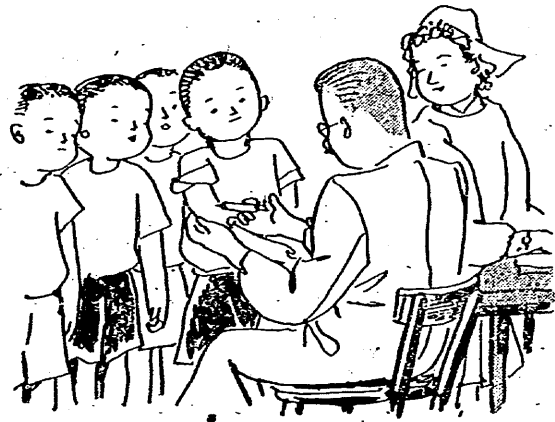
かなかおらないそうね。」

「うちのいさんは、かんゆを

のんでるわ。
となりのおじさんも、いつかかんゆをのんでいた、とたろうくんは思いました。

(五)

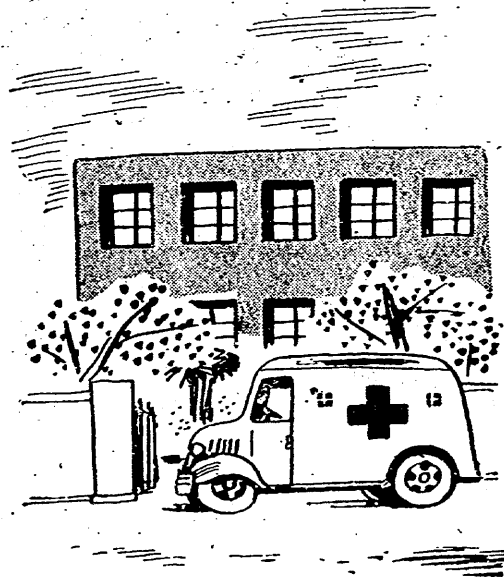
おなかの虫のことも、きんがんのことも、むしろのことも、また、たべものにすききらいがあるということも、自分のからだをじょうぶにしていくなめには、すてておけないいせつなもんだいです。すっかりした、つよいからだをもっていなければ、世の中の役にたつ人には、けつしてなれないにちがいありません。
しかし、たろうくんたちのように、みんながまいにちかおをあわ



せて、いっしょにくらしているときには、でんせん病ほど、こまる病氣はないでしょう。ばいきは、目にみえないほど小さくて、どんどんひろがっていきます。人から人へ、病氣がうつっていくのを、どうしたらふせぐことができるのでしょうか。

このおそろしいでんせん病をふせぐために、むかしから、ずいぶんたくさんの人たちが、苦心に苦心をかさねて、くふうをしてきました。いまでは、たいいていの病氣のよぼうち

ゆうしゃができます。みんなが心をあわせて、いっしょうけんめい
 にふせば、どんなでんせん病でも、おそろしくはありません。
 けれども、まずなによりも、こんなおそろしい病気をださないよ
 うに氣をつけるのが、いち
 ばんよいと思います。ばい
 きんがかおをだすような
 すきをつくらないようにす
 ればよいのだ、と思います。
 そのためには、どうすれ
 ばよいのでしょうか。その
 ひとつは、ばいきんにまけ



びょういん

ないような、つよいからだをつくることです。もうひとつは、どん
 などころに、ばいきんがでてくるかを知って、そんなことにならぬ
 ように、からだをせいけつにしておくことです。からだだけではあ
 りません。たべものも、きものも、すまいも、きれいにしておくこ
 とです。

では、そのためには、どうすればよいのでしょうか。それが、いま、
 たろくんやみつこさんの考えているもんだいです。

よく日にあたって、運動をしよう。

きれいな空気をすおう。

そとから帰ったときには、うがいをしよう。

食事のまえには、きれいに手をあらおう。

はをよくみがこう。

食物をよくかもう。

みんなは、先生やおうちの人、それに、おいしゃさんやかんごふさんにもそうだんして、こんなふうなきそくを、いくつかつくろうと思つています。それが、しっかりまもれたら、きっと、みんながじょうぶになれるでしょう。

そして、学校にきているどのこどもも、また、まちの人、みんなじょうぶになっていくことでしょう。

四 おるすばん

(一)

たろうくんは、きょうは、おるすばんです。さつきから、えんがわで、絵本をみています。くるはずのみつこさんが、なかなかこないで、ちょっと、いらいらしているところですよ。

「リン、リン、リン。」

おや、電話のベルがなっています。あいにく、だれもいません。

たろうくんは、まだ、電話にでたことがないので、

「リン、リン、リン。」

ベルは、なりつづけています。さあ、どうしたらよいのでしょうか。

思いきって、でてみましょうか。それとも、なりやむまで、だまっ
ていましょうか。たろうくんは、たいそうまよっています。
とうとう、たろうくんは、ゆうきをだしました。電話の下までい
きました。ところが、電話は高いところにあるので、どときません。
小さいいすをもつてきて、その上にのりました。ベルは、あいか
わらず、なっています。



いつも、おかあさんがやるの
を思いだして、左手で、じゅわ
きをはずしました。くぼんでい
るほうを、耳にあてます。

たろう　もし、もし。

すこし声が小さいようです。

たろう　もし、もし、どなたですか。

あいて、もしもし、野村さんでいらっしやいますか。大山でござい
ますか。

とつぜん、女の人の声がきこえます。

たろう　はい、たろうです。

あいて、まあ、たろうさん。えらいわねえ。おかあさまはおるすなの。
電話のむこうで、おばさんがびっくりしているようです。

あいて、たろうさん。きょう、みつこがおじやまするともうしまし
たが、みつこは、すこしねつがあるので、さきほどから、
やすませているのですよ。

おばさんは、みつこさんがこれないことをつたえるために、わざわざ電話をかけてこられたのです。

「たろう、さようなら。おだいじに。」

たろうくんは、話がすむと、そつとしゅわきをかけました。おおしごどがすんだようなきもちです。

(二)

えんがわで、みけとあそんでいたら、電どうがいしゃの人がきました。いきなり、ろうかのかべのところへいって、せのびをしながら、かいちゅう電どうで、てらしています。

たろうくんが、ふしぎに思ってみてみると、その人はわらって、

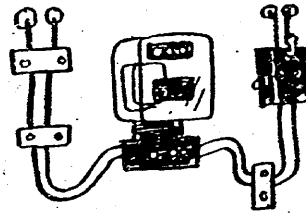
「やあ、こんげつは、五十キロですね。」

といました。メーターをしらべにきたのです。

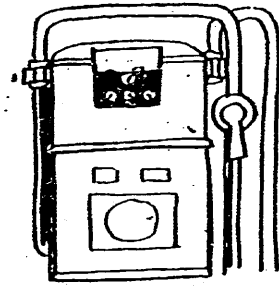
電氣は、メーターをみると、数字がでているので、いくら使ったか、すぐわかるのです。

電氣を使うと、そのぶんりょうだけ、数字が大きくなるようになっていきます。

家には、電どうがやつつあります。門どうをいれると、このつになります。いまは、電力がすくないので、でんねつきは、ほとんど使いません。電氣アイロンも、おしいれの、



電氣のメーター



ガスのメーター

なかに、しまつてあります。

「どしどし電氣が使えるようになって、なんでも電氣の力でやれるようになったら、どんなにいいことでしょうね。」

ど、おかあさんは、ときどきいわれます。そうになったら、おかあさんも、どんなに手がはぶけることでしょう。

しかし、電氣は、たいへん役にたつかわりに、ちゅういぶかくとりあつかわないと、けがをしたり、火事をおこしたりします。電氣が火事のもとになることは、ひじょう

に多いそうです。

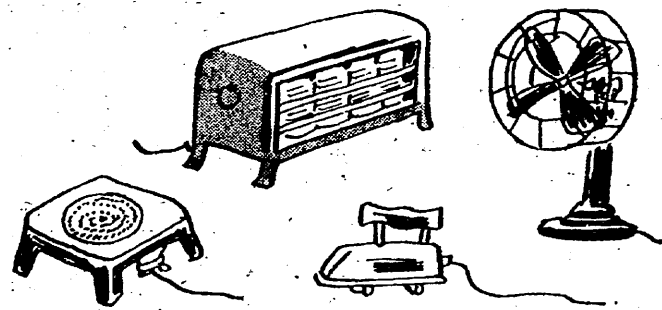
「きのうの火事は、ろう電だったってね。」

「なあに、電氣ごたつをつけわすれたんだそうだよ。」

「なにしろ、火のまわりかたが早かったうえに、じゅうぶん水の用意がなかったというからね。」

きのうも、学校の帰りみち、たろうくんは、そんな話をききました。

たろうくんの家では、ガスも使っています。ガスのメートルは、電氣のどちがつて、小さなはりがまわるようになっていきます。ガスは、人がすうと、ひじょうにどくですから、使わぬときは、よくせんをしめておくように、氣をつけることがたいせつです。



家で使う電氣のきかい

石炭がたりないので、いまは、ガスもじゅうぶんありません。電氣も、石炭を使っておこすことがあります。日本ではおもに、水力電氣といつて、ながれのきゆうな、大きな川の水を使って、おこしています。川の水をせきとめるダムは、そのためにつくられているものです。

(三)

おかあさんが、帰ってこられました。おもそうなふろしきづつみをおろすと、すぐたいどころの方へいかれます。

「たろうさん、よくおるすばんをしましたね。だれもきませんでしたが。」

さつそく、ゆうごはんの用意をされるのでしよう。お米をどぐのか、いきおいよく、水道の水のながれてる音がしています。

「さつき、電どうがいしゃの人が、メートルをみにきたの。」

「まあ、そう。それだけ。」

「それからね。さつき電話がね。」

たろうくんは、おかあさんをびっくりさせたくて、みけをひざからおろすと、おいそぎで、だいどころへかけつけました。

「まあ、電話が―」

おかあさんは、まだきものもきかえないで、たすきがけです。たろうくんが、とくいになってせつめいすると、

「たろうさんも、えらくなったのね。電話にてられるようになった

の。おとうさまにおみせしたかったわ。
しんみりしたちようして、そういわれました。せんちについて、

どうとう帰ってこなかったおとう
さんのことを、たろうくんは、よ
くおぼえています。



大きな手で、だっこでもするよ
うに、いつもあたまをなでてくれ
たおとうさん。かみの毛がのびる
と、バリカンで、ゴリゴリかって
くれたおとうさん。

おとうさん。たろうは、おかあ

さんをおたすけして、しっかりべんきょうします。そして、おと
うさんにまけない、正しい人になります。

おとうさんがなくなられたあと、おかあさんが、どんなに苦勞を
して、自分をそだてていくたさるか、たろうくんには、よくわか
っています。たろうくんが元氣だと、おかあさんはよろこばれます。
おかあさんがよろこばれると、たろうくんはうれしいのです。

「みっちゃん、病氣だつて。」

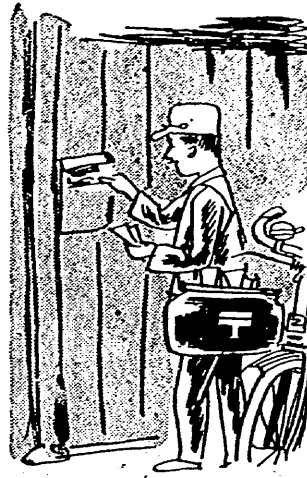
「いけないわねえ。きつとかぜよ。このごろは、よる、ずいぶんひ
えるから。」

たろうくんは、のどがかわいたので、おかあさんから、お水をコ
ップに二ばい、いただきました。水道の水は、よくしゅうどくして

あるので、そのままのんでも、からだをこわしません。まどのあかりにすかしてみると、うっすらと青い水が、コップのガラスごしに、きらきら光っています。ひいやりとした、おいしい水でした。

(四)

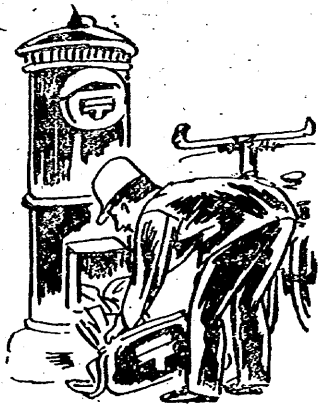
あくる朝、たろうくんは、いつもよりすこしはやめに、みつこさん
をさそいました。風のない、くも
った日です。



みつこさんの家のまえで、ゆうび
んはいたつのおじさんにあいました。
おじさんは、黒い大きなかばんを、

赤いじてん車につけて、あちらこち
らど、手紙をくばってあるいていま
す。みつこさんの家にも、はがきを
二、三まいいれました。

たろうくんが、学校へいくまでに



は、ポストがみつつあります。火のみやぐらの下にあるポストでは、
朝いぐとちゅうで、よくポストのおなかから、はがきや手紙をとり
だしている、ゆうびんはいたつのおじさんにあいます。ちようどそ
のじこくが、あつめる時間にあたっているのでしょう。そのおじさ
んは、たいそうふとっていて、いまあった、くばる人とはべつの人
です。

みつこさんの家は、門のうちがわに、小さなうえこみがあります。
たろうくんが、げんかんのまえてよぶと、いきなり、よこのまどが
あいて、みつこさんがくびをだしました。

「なあんだ。もういいの。」

「きのうはごめんなさい。もう、すっかりいいのよ。」

みつこさんは、あいかわらず、目をくりくりさせています。

「いま、ごはんがすんだところなの。すぐいくわ。」

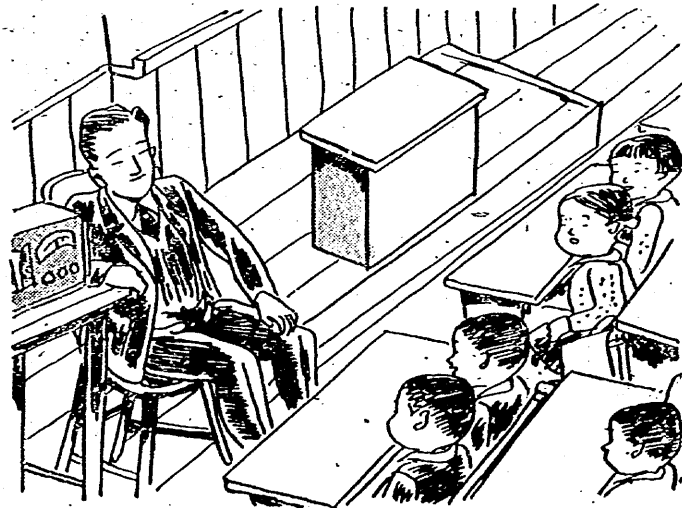
「きょうのほうそうは、とてもおもしろいそうだよ。」

まい週一かい、組のものがみんなできくラジオのほうそうを、た
ろうくんは、たいそうたのしみにしているのです。

たろうくんは、まいばん、家でもラジオをきいています。こども

の時間でも、むずかしくてわから
ないところは、よこでしごとをし
ている、おかあさんにききます。
ニュースも、だいじなことは、お
かあさんが、かんたんにして、わ
かりやすく話してくださいます。

しかし、学校でみんながいっし
よにきくラジオは、家できくのど
ちがって、またおもしろいもので
す。きいているうちに、わらいた
す人もあります。ためいきをつく



子もあります。それに、知っているうたでもあれば、みんなで、がっしょうしたりします。

ほうそうがおわると、あつまって話しあってみます。おもしろいお話などは、みんなで、いろいろな役になってみて、たのしいげきをすることもあります。そんなときは、紙のきものをきたり、教だんをぶたいにしたりしてやるのです。

(五)

教室のうしろの黒ばんには、先生がまいにち、あたらしいできごとを書かれます。たろうくんたちも、ときどき書きます。紙に絵や文を書いてきて、はりつけることもあります。これが、たろうくん



の学級のかへ新聞です。ラジオで、いつ、どんなほうそうがあるかということも、たいてい、この新聞でわかります。えんそくのときにも、ゆくさきのことや、いろいろなちゅういが、ここに書かれました。いまはちょうど、運動かいのまえで、あ

まり書くことが多いので、大きな紙に書いて、かべいっぱいにはってあります。

「リレーは、ひておくがいるから、きつとかつよ。」

「五十メートルのきょうそうは、だれがいちばんかなあ。」

「運動かいのせいせきは、また、この新聞に書こう。」

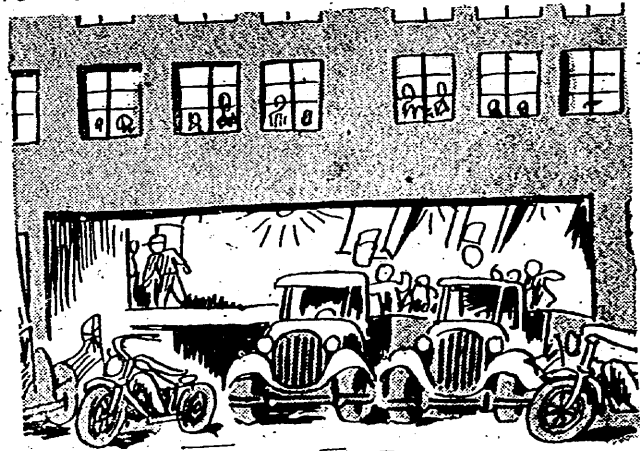
新聞のかかりの田口くんが、たいそう、いきこんでいます。

組にかへ新聞ができてから、みんなが、自分の家のきんじょにおこったできごとや、おうちの人にかいたおもしろいことがらを書きつけるので、休み時間にそれをよむのがたのしみです。

しかし、書く場所がせまいので、ほかの人にもよく書けるように、氣をつけて書きます。そのせいをりをするのが、新聞のかかりの田口く

んと井川さんの役です。これは、ひとつきこうたいになっています。

わたくしたちの家には、まいにち、新聞がときます。そのおかげで、その日その日の大きなできごとわかりますし、天気よほうや、はいきゅうのこともわかります。遠くて、きのうおこったことが、もう、写真まではいって、のせてあるのには、おどろきます。もし、新聞がなかったならば、たいそうふべん



新聞のつみだし

なことでしよう。

「おかあさん、この写真なあに。」

新聞をよんでいるおかあさんのかたごしに、たろうくんは、よくのどきこんだりします。早く自分でよめるようになりたい、というつも思います。

たろうくんは、学級のかべ新聞のことを考えてみて、かべ新聞でもやっぱり、ひじょうに役にたつと思いました。かべ新聞も、みんながうまく使えば、りっぱに、新聞のはたらきをするからです。

たろうくんも、近いうちに、新聞のかかりになるはずです。そのときには、新聞のことを、いろいろしらべてみて、あたらしいころみをしたいて考えています。たとえば、新聞のなかから、めずら

しい写真を切りぬいてきて、はりつけてみるのもおもしろいでしょう。ほかの学級や上級生の教室をみてあるいたら、そのほかにも、きっとよい思いつきがあるにちがいません。

あたらしいできごとを知らせてくれるものには、新聞のほかに、ラジオがあります。そして、ふつうラジオは、新聞より、もっと早くつたえてくれます。しかしラジオは、ききのがしてしまうと、もうまにあいません。新聞のように、あとまでとっておくこともできません。そのかわり、ラジオは、じっきょうほうそうのように、できごとを、すぐそのまま知らせることができます。やきゅうのほうそうがあるときには、ラジオをかけている店のまえで、人がくろやまのようにあつまっているのもみられます。

新聞もラジオも、それから、ゆうびんや電話も、そして、電氣もガスも水道も、どれもこれも、わたくしたちが生きていくために、ひつようなものです。そう、いうものがあるために、わたくしたちの生活は、どんなにべんりにならていることでしょう。

しかし、まだラジオをきけない人たちもいますし、水道やガスや電話をひくことのできないところも、たくさんあります。たろ、うくんは、自分がおとなになったならば、もっともつとべんりな、住みよい世の中にしたいと考えています。

五 はくぶつかん

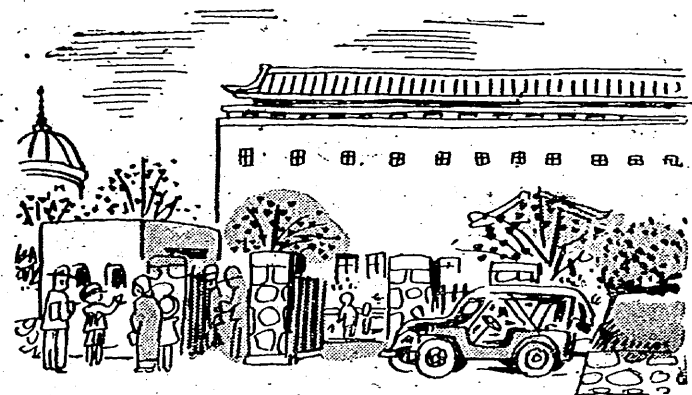
(一)

となりのおじさんが、はくぶつかんにいかれるというので、たろくんは、みつこさんをさそって、つれていつていただくことにしました。おじさんはわらって、

「うん。はくぶつかんは、まだむりかな。帰りには、動物えんにもよろう。」

といわれました。

きょうは、学校が休みなので、おべんどうをもって、朝からでかけます。いくつか電車を乗りかえて、やっと、はくぶつかんのある



町につきました。

はくぶつかんは、大きな森の近くにある、きいろい二かいだてのたてものです。おじさんは、入口で、きつぷを買いました。

門をはいつて、いけのふちの、うつくしいにわを通っていくと、りっぱなげんかんにてます。秋の日が、いっせいにふりをそいでいるにわては、はるばるいなかからでてきたらしいおじいさんが、石にこしをおろ

して、休んでいました。きょうは、ふたんより、人がすくないのだそうです。

入口から、すぐ右のへやにはいました。てんじょうが高くであかるい、大きなへやです。ガラスの戸だながいくつもあって、そのなかに、いろいろなものならべてありました。

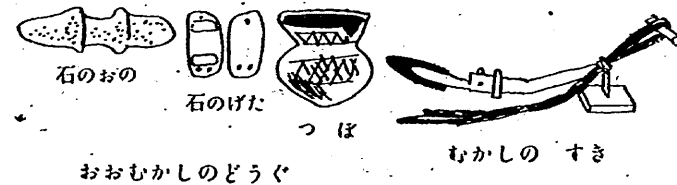
「これは、おおむかしの人が使ったとうぐた。それ、石のおがあるだらう。このつばは、みんな、土でつくってあるのだよ。」

おじさんが、ゆびさす方をみると、もようのはいった、おもしろいつばが、いくつもありません。石のおのというのは、石をこすつて、はのところをうすくしたものだそうです。

まだ、ぐあいのよいざいりょうも、べんりなきか
いもなかったころですから、このようなものをつく
るのにも、どんなにほねがおれたことでしょう。
「こんな古いものを、だれがいまでももっていたの
でしよう。」

みつこさんが、おじさんにたずねています。
「そうそう、これはね。土のなかから、ほりだされ
たものなのだよ。おおむかしに人が住んでいたと
ころからは、いまでも、よくほりだされることが
ある。」

「まあ、よくこわれなかったわねえ。」



「ああ、ぼく、思いましたよ。いつか、学校のかへ新聞にでていた。
静岡^{しずく}けんで、ほりだされたって話ね。」

「たろ^{たろ}くんは、よく知ってるなあ。ごらん、静岡でほりだされた
ものが、もうここにきているよ。」

おじさんは、そういって、つぎのへやにはいっていきました。

(二)

つぎからつきへと、へやがつづいていきます。古いものがおいてあ
るので、いためないようにと、空氣^{くき}のしめりぐあいにまで、氣をつ
けてあるのだそうです。みている人たちもしずかなので、ガランと
して、ものおとひとつしません。

一かいには、おおむかしのどうぐのほか、むかしの人のつくった、みごとなかたなや、すずりばこのようなぬりものがありました。どれも、名人といわれた、すぐれた人たちのつくったものです。いろいろなかたちの、ほどけさまもありました。木でつくったものや、かねでつくったものがあります。大きなのは、ガラスの戸だなのそとにおいてありました。

「はくぶつかんでは、ならべてあるものに、手をふれてはいけなよ。くる人がみんなさわったら、せっかくだいじにしてあるものが、いたんでしまうだろう。」

おじさんは、にこにこしていわれます。たろうくんは、びっくりして、ほどけさまのだいの方へのばしていた手をひっこめました。



「あれは、奈良にある、ゆうめいなおてらのほどけさまだ。やさしいおかおだろう。こくほうになっっているよ。」

「おじさん、こくほうというのはなに。」

たろうくんが、ねっしんにききます。

「こくほうというのはね。日本の國では、むかしこんなものを使っていた、また、こんなりっぱなものができた、ということ。」

のちのちまでつたえることができるように、だいじにとっておくものことだ。そうしないと、きつと、こわれたり、なくなってしまうたりするだろう。ここにあるほどけさまは、みんな、千年以上もむかしのものだが、こくほうになっているものはすくないよ。

ひとまわりしたら、すっかりつかれました。それで、きゅうけい室で、ひと休みすることにしました。

(三)

二かいには、絵があります。

「まあ、あんなにさけているわ。ずいぶん古い絵ね。」

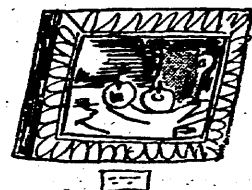
みつこさんは、いつものように、目をくりくりさせます。

「これは、すみで書いてあるわ。たろうさんのおうちの、どこのまの絵とにているじゃないの。」

「学校のずが室にかけてある絵とは、ずいぶんちがうなあ。」

おじさんの話によると、すみ絵は、むかし、中國からわたってきたものだそうです。

「中國の人が書くのと、西洋の人が書くのとでは、おなじものを書いて、ずいぶんちがった書きかたをするだろう。遠くはなれて住んでいると、



こんなにまでちがってくるのだねえ。

これは、絵ばかりではありません。おんがくの事を考えてみても、たいそうちがっています。みつこさんは、ねえさんのならっているおことと、ラジオできくオーケストラとをくらべてみて、なる

ほどと思いました。

そのつぎのへやには、すみで書いた、字のかけものがあります。まるで、おどっているような、いきおいのよい大きな字もあれば、こまかく、きれいにならんだ字もありました。日本や中国では、むかしから、ふでとすみを使っていますが、



西洋では、ペンとインキで書きます。

せとものをならべてあるところも通りました。大きなおさらのなかに書いてある絵がおもしろいので、ふたりは、ガラスの戸にかおをおしつけて、のぞきました。こんなにうつくしいせとものも、土をやってつくるのだときいて、びっくりしました。

くたびれたので、なか休みをすることにしました。ちょうど、おひるになります。

「おじさん、そとのしばふで、おべんとうたべようよ。」



オーケストラ

たろうくんは、まっさきに、大きないだんをかけおりていきま
す。

いけのそばの、石のこしかけにね
ころんでいると、すみきつた青い空
を、ゆうゆうと、雲がながれていき
ました。

「むかしの人もえらいわねえ。汽車
も電車もなかったのにねえ。」

とつぜん、みつこさんは、ほっぺ
たをおさえて、ためいきをつきまし
た。



「電どうだってないさ。まいにち、てい電とおなじだぜ。」

たろうくんは、大きなおむすびをほおばりながらこたえます。

いけのふちに、はとがまいおりて、よちよちあるいているのがみ
えます。水の上に、かれたはっぱが一まい、ぽっかりうかんでいま
す。

「ここは、動物えんにいくのです。」

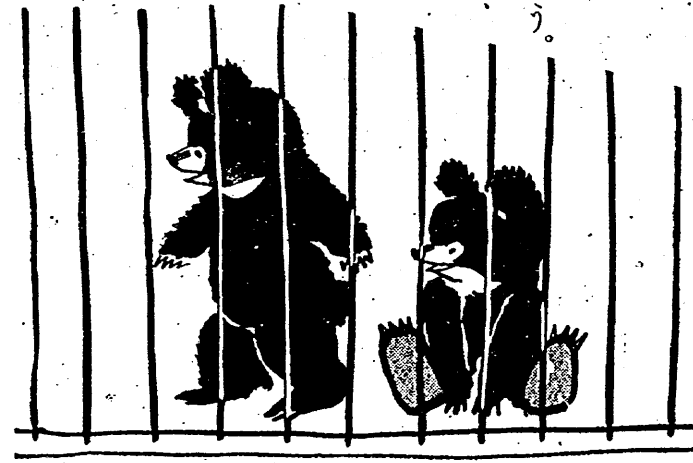
(四)

チツチ、パツパ、キイ、キイ、キイ。

ことりのおうちは、青いうち。

小ぞうのおやどは、まるいやね。

赤いおしりの　さるさんも、
白いおくびの　つるさんも、
いっしょに　おひるをたべましょう。
かわいい　こぐまのあかちゃんが、
ひなたぼっこをしています。
「やあ、くまがひるねをしていますよ。」
「どれどれ。あの、くびのところに
白いわのはいっているのが、月の
わぐまというんだよ。」
くまのおりのまえは、こどもてい
っぱいです。



「おじさん、白いくまはいないの。」
「そうだね。ここにはいないようだね。むかしはいたのだね。」
「なぜ、白いのと黒いのとがあるの。」
「白くまのすんでいるところは、まっ　白いゆきやこおりでうずまっ
た北の國だ。白いところに、黒いくまがいるのでは、すぐみつか
ってしまっだろう。」

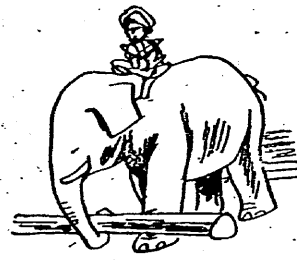
「おもしろいなあ。じゃあ、てきにみつからないようにするんだね。」
「ゆき國のうさぎは、すんでいる場所のようすで、色が変わるよ。
ゆきがあるときは白いし、ゆきがきえると、茶色になる。」
「たろうくんは、ぞうがだいすきです。大きなからだのくせに、か
わいい、小さな目をもっています。長いはなが、するするとのびて

は、えさを口にもっていくのが、ゆかいてなりません。

ぞうは、力がつよいから、よくならして使くと、たいへん役にたつ。外国には、ぞうを使って、おもいものを

はこぶところもあるよ。

おじさんがそういったとき、ぞうがきゆうに、



ドシンと足ぶみをしたので、みつこさんは、び

っくりしてとびあがりました。

ライオンがほえています。いってみると、小さなライオンのこともが、えさをほしがってないでいるのです。おりのところに立ちあがって、せのびをしてまっています。そのようすが、ちょうど、こいぬのようで、たろくんもみつこさんも、たいそうかわいらしく

思いました。おやのライオンは、こどもたちのうしろをぐるぐるまわって、わるいことでもするものはいないか、とみはっています。

ライオンのおりのうらに、くびと足の長い、のっぽのきりんがいました。みあげるように、せいの高い動物で、足もたいそう早いそうです。

こどもたちが、石をなげて、いたずらをしているので、おじさんがちゅういをしました。

そのとなりは、せながにこぶのあるらくだです。さばくといって、

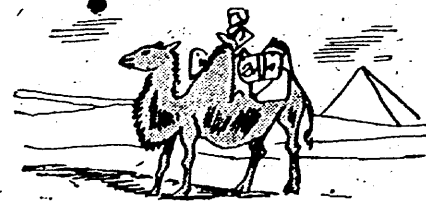




(上)きりん

はてしもなくひろいすな原にすむ動物で、そこを旅する人たちは、荷物をらくだのせなかにのせて、はこぶのだそうです。からだは、うまより、すこし大きいように思いました。

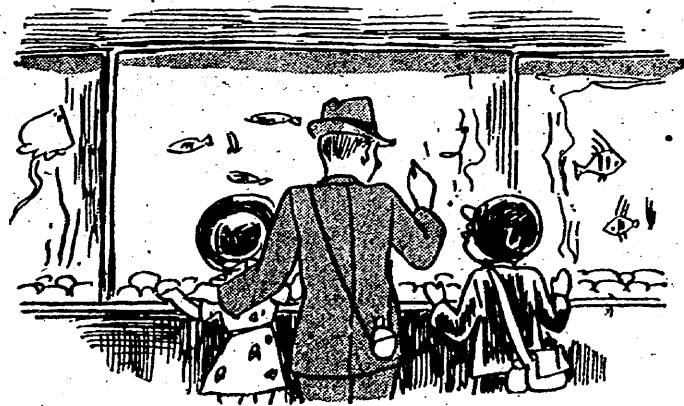
わしやたかのおりの近くに、すいぞくかんがありました。ここには、いろいろなさかながいます。ガラスの水おけのなかで、大きなさかなや、小さなさ



(左)さばくをあるくら

かなが、ゆっくりとおよいでいました。ひれが、きらきら光って、きれいです。海のそこにおりたら、きっと、こんなふうにみえるかもしれません。

すいぞくかんをでたところに、大きなくじらのせぼねが、ならべてありました。二十メートル以上もあるという、大きなものです。きっと、遠い南の海をおよいでいたのでしょう。たろくんは、いつか先生にきいた、いさましくじらどりの話を思い出しました。



(五)

動物えんをでるころには、もうそろそろ、日がしずみそうでした。ぞろぞろと、人が帰ってきます。おじさんにきいてみると、

「あれは、絵のてんらんかいがおわったのだ。あすこにみえるのが、びじゅつかんといって、絵をならべて人にみせるところだよ。」とおしえてくれました。

町にでると、もうぽつぽつと、あかるいひがみえます。電車が、人をいっぱいのせて、ゴーゴーと通りすぎていきます。

「やあ、あの大きなたてものはなあに。」

たろうくんがゆびさす方をみると、ハ、かいもある、しかも大きい

なたてものです。一かいの、どうろにむかったところには、すばらしいかざりまどがあります。



ひゃっかてん

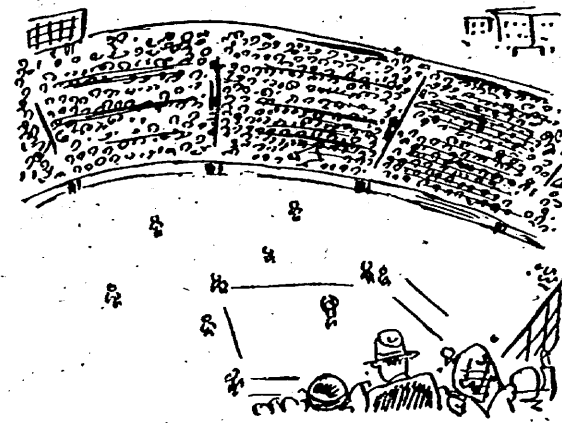
「あれは、百貨店だよ。なんでも買っている、大きな店だ。あのなかには、しょくどうもあるし、どこ屋や写真屋まであるよ。たろうくんは、まだいちどいったことがないのかい。」

「わたし、中町のにいったわ。てっぺんに、あそび場があつて、おもしろかったわ。」

百貨店のとなりには、げきじょうやえいがかんがならんでいます。そろそろはじまるじこくなのでしょう。人があつまっています。

おつとめをおわった人たちは、ここで、一にちのつかれをわすれ、あたらしい元氣をとりもどすのです。うちのおかあさんも、いちどいけばよいのに、とたろうくんは思いました。たろうくんたちは、ときどき、学校でえいがをみます。

帰りの電車のなかから、やきゅうじょうをみました。せいの高い、大



きなけんぶつせきがついていて、遠くからみると、まるで、大きなまるいおしろのように入えます。

みつこさんははじめてでしたが、たろうくんは、もう二三どきたので、よく知っています。あんな大きな場所が、けんぶつ入でまんいんになったら、どんなにすばらしいだろう、とみつこさんは考えました。

はくぶつかんもどうぶつえんも、げきじょうややきゅうじょうも、それがあるからといって、たべものやきものがぶえるわけではありません。たりない家がたつわけではありません。けれども、もし、そういうものがなかったら、人々の生活は、どんなにつまらないものになるでしょう。

だれもがたのしくくらしでいくために、このようなせつびは、ぜひなくてはならないのだと思います。そして運動場やこうえんなども、もっともつとたくさんできるとよいと思います。

小さなこうえんが、あちこちにできたら、家のたてこんだ町のかの人たちは、どんなにうれしいことでしょう。こどもたちが、道ばたであそんでいて、けがをするようなことも、きつとなくなるにちがいありません。

六 海への町で

(一)

たろうくんは、おかあさんといっしょに、いなかの町へいきました。ここは、おかあさんの生まれた町です。

町は、かいがんにあるのですが、鉄道は、すこしはなれた山のてを通っているのて、駅からバスに乗りました。

しばらく雨が降らないとみえて、白くかわいたどうろからは、しきりに、ほこりがまきおこっています。道のりょうがわには、たんぽがつづいていて、ところどころに、おひゃくしょうのすがたがみえます。町へはこんでいくのでしょう。やさいをリヤカーにいっば

いつんだ、じてん車が走っていきます。

町へはいると、きゆうに、にぎやかになりました。いろいろな店がみえます。道ばたには、よく日にやけた、元氣そうな子どもたちが、たくさんいます。

バスは、小さなはしのてまえてとまりました。おりると、すぐ目のまえを、ゆつくり川の水がながれています。どこからともなく、しおのにおいがしてきます。

「おや、おかあさん。この川、どっちにながれているの。」

たろうくんは、ふしぎに思ってたずねました。川の水は、すこしずつ、山の方にむかって、ながれていきます。

「まあ、たろうさん。よく氣がついたのねえ。この川も、いつもは、

海の方へながれているのよ。でも、すぐ近くで海にながれこんでいるものだから、海の水があがってくるときには、それにおされて、ぎゃくにながれることもあるのです。ほら、この水は、海のおいがしているでしょう。」

「ほんとうに海の水があがってくるの。」

「そうよ。たろうさん、いつか、かいがんであそんだとき、波のくる場所が、朝とひるとでは、ずいぶんちがったじゃありませんか。おぼえてる。」

「ふうん。」

たろうくんは、くびをかしげて考えこみました。

ふたりのあるいていく道ばたの家には、さかなをずらりとならべ

て、ほしてあるのが、目につきます。ぶんど、りょうし町らしいに
おいがします。

だんだん、かいがんが近くなっ
てきました。しかし、波の音は、
まだきこえてきません。大きなあ
みをほしてあるところも通りまし
た。

やっと、まつ原にでました。青、
いうつくしい海がみえます。

「やあ、海だ。」

たろくんは、まっすぐに、すなはまの方にかけたしました。お



かあさんも、うれしそうについてこ
られます。

海は、たいそうしずかでした。波
うちぎわにいつてみると、小さな波
が、チャボンチャボンと音をたてて
いました。すなのなかに、きらきら
光るかいがころがっています。

ふたりは、すなの上に、こしをお
ろしました。遠くの方に、うつすら
とみえているのは、きつと大きな島
でしょう。ふりそそいでいる日の光

で、うつくしくかがやいている水のむこうに、小さな船のうかんで
いるのもみえます。

「おかあさん、あの船、なにしてるの。」

「さかなをとっているのですよ。りょうしさんが、大きなあみでと
っています。」

「どんなさかなをとるの。大きいのもどるの。ぼく——まえに、海
でおさかなとったねえ。」

たろうくんは、まだ学校にあらないまえ、つれていってもらっ
た、しおひがりのことを思い出しました。そうです。そのときには、
海の水がずっとおきまでひいて、たくさんの人が、はだしてかいを
ひろっていました。たろうくんも、おとうさんにてつだってもらっ

て、かいをみつけたら、小さなさか
なをすくったりしました。

「わかったよ、ぼく。おかあさん
のさつきいったこと。海の水が
にげてしまうと、いつかのしお
ひがりのときみたいになるんだ
ねえ。いまみたいだと、かいが
ひろえないもの。」

おかあさんは、にっこりして、

たろうくんのうわぎのえりをなおしてくださいました。遠い水のむ
こうに、ぽっかりと、白いまるい雲がうかんでいます。



しおひがり

あくる日から、たろうくんは、まいにちかいがんにでてみました。海の空気が、すがすがしくて、たいそうよいきもちです。

このあたりは、すこし入りこんで、わんになつていたので、右ての方には、青いまつ林の丘が、海のなかに、ぐっとつきでています。青い林のなかで、ところどころ、うすあかくみえるところは、きつと、もみじでもあるのでしょう。白くつついているすなはまの上には、りょうをしている人たちのすがたが、ぼつぼつと、黒い点をうつたようにみえます。

波うちぎわでは、じびきあみという大きなあみを、男の人も女の

人も、こどもたちまでで、いっ

しょうけんめいにひいているのを

みました。ひきあげたあみのなか

には、大きなさかなや小さなさか

なが、ぴちぴちはねていました。

「えんやらほう、えんやらほう。」

じびきあみのかけ声は、ずっと

むこうのはまからもきこえてきま

す。

あるとき、たろうくんが、すこ

し西の方のかいがんでいってみ



ると、まつ林の近くで、さかんに白いけむりがあがっていました。ふしぎに思つて近よつてみると、小さなこやがふたつあつて、大きなかまをたきつけています。

おもしろくなつてのぞいてみると、ひとりの男の人が、かごにいっぱい、白いものを入れて、でてきました。なかなかおもそうにみえます。

おや、おさどうかしら——と、たろうくんは思いました。

思いきつてたずねてみますと、海の水から、しおをとっているの



だ、とせつめいしてくれました。しお水をたいて、水けをとると、あんな白いしおができるのだそうです。おさとうだと思つたのは、しおだつたのです。

たろうくんは、これまで、海の水のしおからいことは知っていましたが、りょうりに使うしおが、こうしてつくられるということは、きょうはじめてわかりました。

これはきつと、みっちゃんも知らないぞ、とたろうくんは、すぐ知らせてやりたくになりました。

しおは、しおからくて、あまりありがたくないような氣もしますが、帰つて、おかあさんにきくと、人のからだには、ぜひなくてはならない、ひじょうにたいせつなものだということでした。

(三)

おかあさんの生まれた家の近くには、小さな工場があります。こへは、まいにち、たけさんのさかなが、はこばれてきます。工場では、なまのさかなに、いろいろと手をくわえて、またどんどん送りだしています。

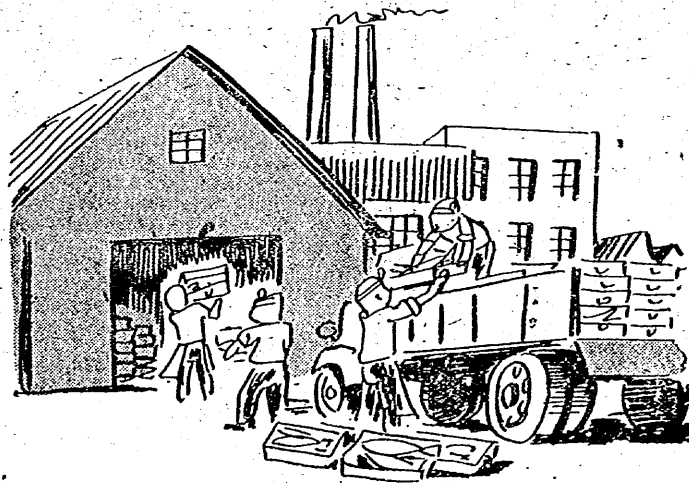
なまのさかなは、そのまま、遠くの町まではこばれていくと、きせつによっては、とちゅうでくさったりすることがありますから、とれるとすぐほしたり、しおにつけたり、くんせいにしたりするのです。

こうしておけば、長い日かずをかけて、遠いところへ送っても、

わるくなる心配がありません。ことに、かんづめにしたものなどは、外国にまで送られていきます。

たろうくんは、まいにち、りょうをして、いる人たちのようすをみるのがたのしみでした。そして、目のまえでとれたさかなをみるのが、たいそうゆかいでした。

としおくんやみつこさんと、いつか町へいったときは、とうとう、とかいの魚いちばをみにいけませ



さかなの工場



魚 い ち ば

んでしたが、こういうところでとれたさかなが、かもつ列車やトラツクで、どんどん町のいちばへはこばれるのでしよう。

とかいで、店にならんでいる、ほしさかなやくんせいも、みんな、こういうふうにしてとれたものが、いろいろと手をくわえられ、いろんな人の手を通って、はこばれていくのでしよう。

たろうくんは、かいがんへきた

おかげで、どんなふうにして、さかなが町の人たちの手にはいるのか、よくわかったような気がしました。

さむい風のふく冬がやってきても、りょうしたちは、つめたい水にぬれながら、さかなをとっています。なかには、なんにちも家をはなれて、小さな船に乗りくみ、あら波とたたかっている人たちもあります。それは、どんなになれたしごとであったにしても、けっして、やさしいことではないでしょう。

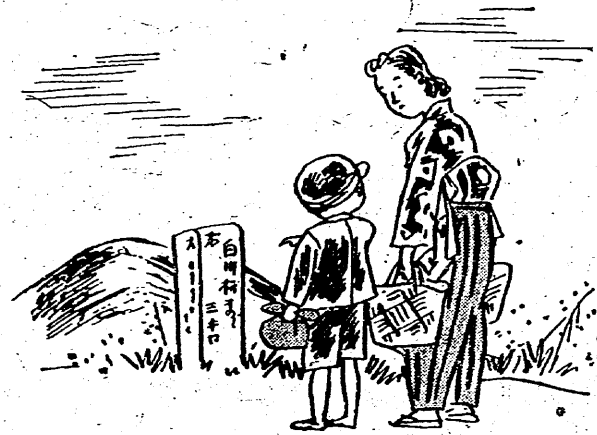
(四)

この町から、小さな山ひとつこしたとなりの村には、いとこのとしおくんが住んでいます。たろうくんは、おかあさんとふたりで、

としおくんの家へあそびに行くことになりました。
よくはれた秋のごぜんです。ふたりは、海にそった道を、ゆっく
りあるいていきました。しばらくいくと、道が山のてにまがって、
だんだんのぼりになります。いつのまにか、まわりに家がすくなく
なってきました。

さかなを買いにいくのでしょうか。大きなかごをせおった、わか
い男の人といきちがいました。近くの山から切ってきたのでし
ょう。たきぎをいっぱいつんだ、には車にもてあいました。

のぼり道が長いので、たろうくんは、ときどき道ばたで休まし
た。大きな木のねもとにある石にこしかけていると、どこかで、谷
川の水のながれる音がきこえるようです。



「まあ、ごらんなさい、たろうさん。あすこに、道しるべの石があ
りますよ。村まで三キロと書いて
あるわ。」

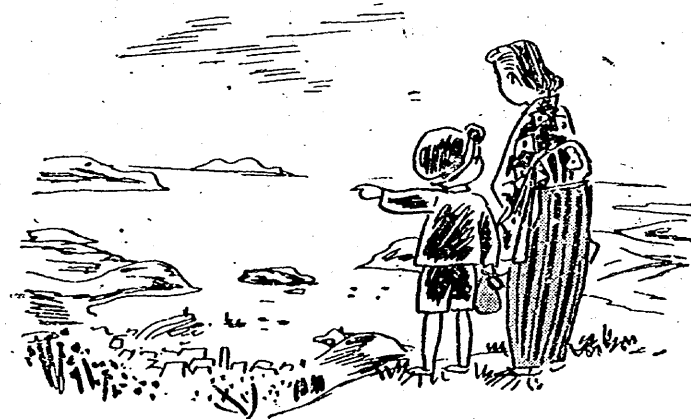
「おかあさんが、大きな声でいわれ
たので、たろうくんはびっくりしま
した。」

「道しるべって、なんなの。」

「みると、その石には、字がふかく
きざみつけられているようです。」

「道しるべというのはね。この道を
いくとどこへでるが、また、ここ

から村や町まではどのくらいの
みちのりか、ということを、石
や木のはしらなどに書きつけて、
通る人のべんりなようにしたもの
です。きつと、これからも、
いくつかみつかりますよ。
おかあさんは、そういつて、立
ちあがりました。
「さあ、もうすぐ、とうげですよ。
そこで、おべんとうにしまし
うね。」

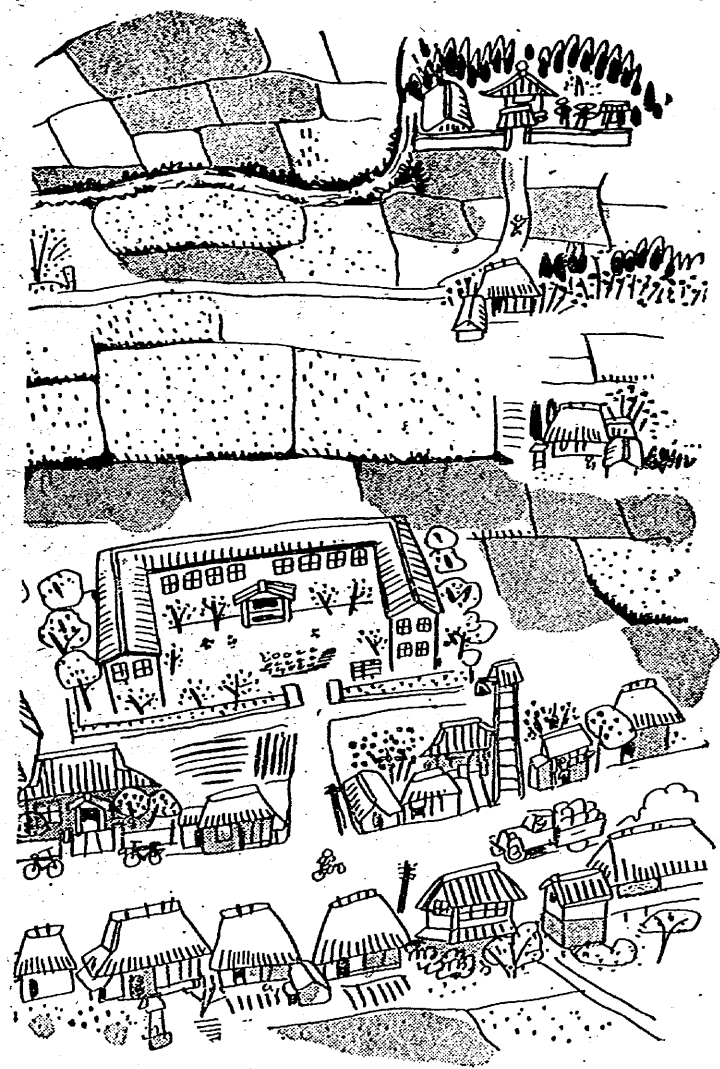
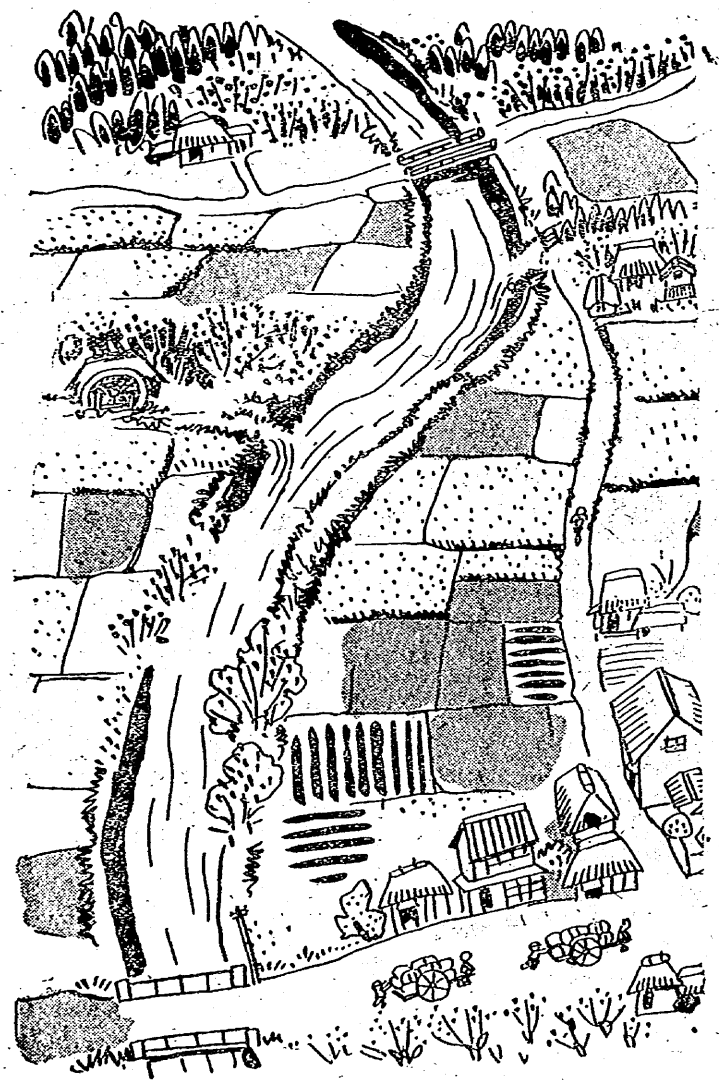


道は、だんだんけわしくなります。
やつと、とうげにでました。ここは、たいそうよいながめです。
ふたりは、海にむかった丘の上で、べんとうのおむすびをたべまし
た。

目の下に、青々とした、ひろい海がみえます。のぼってきた方が
くをみおろすと、りょうし町のたてこんだ家々が、マツチばこをな
らべたようです。おきにてている船は、点のように小さくみえます。

(五)

とうげ道があるいていくと、目の下に村がみえてきました。とり
いれのすんだひろい田が、いちめんにひろがっています。川が白く、



光つて、ゆうゆうと田のなかながれていきます。はしもみえました。
丘の上に立っていると、ずっと遠くから、うしのなく声がきこえてきます。にわどりのなく声も、きこえるような氣がします。ふたりは、くさむらにこしをおろして、しばらく、村のようすをながめました。

おかあさんがゆびさして、ひとつひとつせつめいしてくださいます。火のみやぐらの左にみえる、大きなたてものは、学校です。そのとなりのかわらやねは、役場です。ずっとむこうの川のふちに、小さな森があります。そのすこし右には、おてもらもみえました。

家は、わらぶきが多いようです。ところどころ、白いかべの大きな家もあります。いくすじが、小さな川がながれていて、ひとつふ

たつ、水車があるのもみえます。きっと、この川から、田へ水をひくのでしょう。

としおくんの家は、学校のすぐ近くだそうです。むかいに、ちゅうざいじよがあるということですが、それは、ここからではわかりません。学校や役場のあるあたりは、いくらか家がこみあっているようですが、そのほかは、あちらこちらに、ぼつぼつと、のうかがみえるくらいです。人通りも、あまりありません。

たろくんは、山のすぐ下の道を、米だわらをつんだ荷車が二たいて、学校の方へむかっていくのをみつけました。おもそうに、あとをおしている人のすがたもみえます。

おかあさん、あのお米、どこへはこぶの。

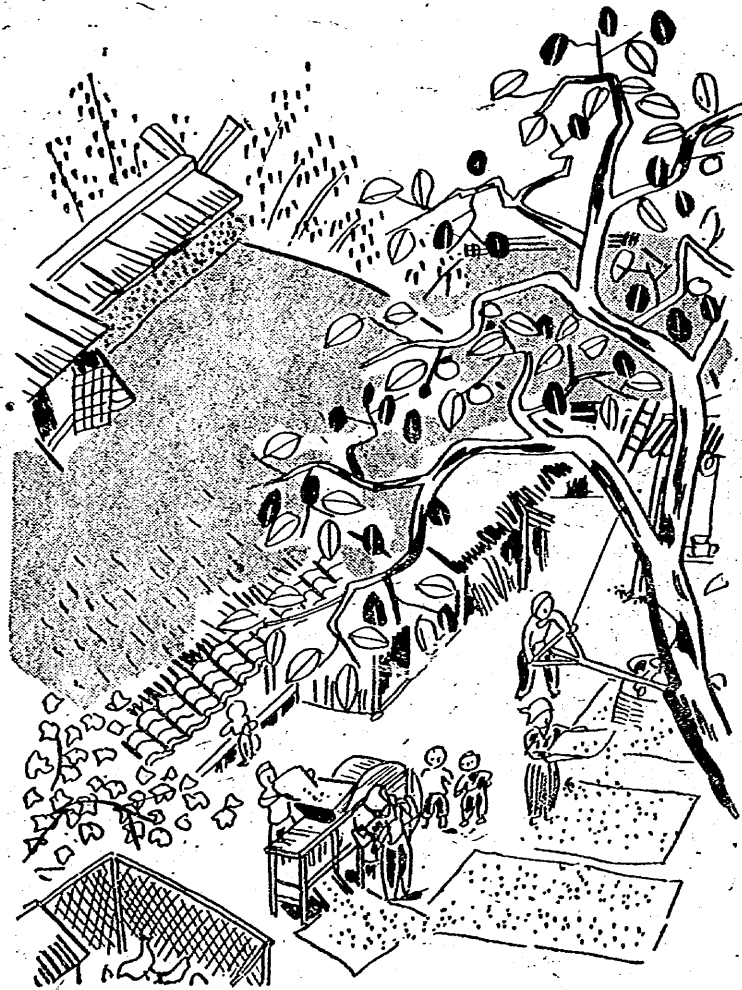
「そうですねえ。なんのお米でしょう。そうそう、きつときょうし
ゆつかもしれないわ。それなら、たぶん役場へでもはこぶのです
よ。」

きょうしゆつの米は、役場のかかりの人が、しなものとめかたと
をしらべ、ごうかくしたものをまとめて、送りだすのだそうです。

とりいれも、すっかりおわりましたし、もう、きょうしゆつがは
じまっているにちがいありません。

(六)

さかをおりていくと、もうぼつぼつ、のうかがあります。どの家
も、町の家とはちがって、家のまえに、小さなひろばのような、ひ

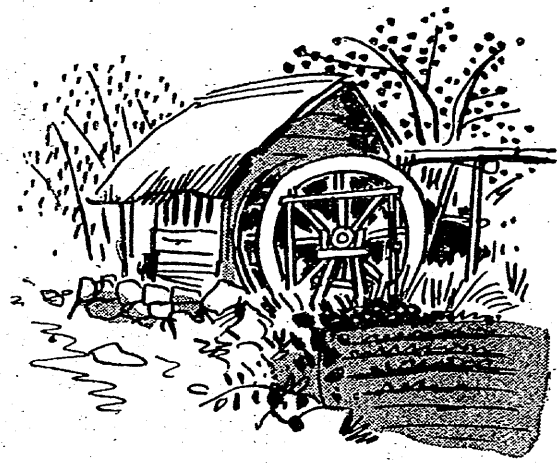


ろいにわをもっています。きょうしゅつの用意をしているのでしよう。男の人、女の人、このひろにわで、いそがしそうにはたらいしています。どのにわにも、むしろの上に、もみのついた米が、いっぱいほしてあるのが目につきました。

まだ、だっこくきで、いねのほから、もみのままの米つぶを、うちおとすしごとをしているところもありました。もみがらをえりわけるきかいを、使っているところもあります。ブーンと風をおこして、もみがらをとばしているのがみえます。

女の人たちも、なれた手つきで、たのしそうにしごとをしていきます。たろうくんは、めずらしいので、なんども、たちどまってみました。そして、ずいぶんべんりなきかいを使っているものだ、と感じ

心しました。こういうきかいは、たいてい、きょうどうで使っているのだそうです。



せいまいじょ

「あれで、すぐたべられるお米になるの。」

「いいえ、あれだけでは、まだもみがついていますから、せいまいじょへもっていったら、

きれいなお米にしてもらうのですよ。」

しかし、もみをとってしまつと、もちがわるくなるので、の

うかでは、すぐ使わない米は、そのまましまっておくそうです。
せいまいじよは、電気を使っているのもあります。また、水車を
使っているのもあります。山の上からみた水車が、きつとそれでし
よう。

にわにいどのある家が多いようです。いどのよこのかきの木に、
よくうれた、おいしそうなみが、いっばいなっているところもあり
ました。うしのなく声が、すぐ近くにきこえます。

だんだん、火のみやぐらが、近くにみえてきました。学校も、も
う近いのでしよう。二、三人、学校の帰りらしい、小学校の生徒に
てあいました。

道ばたに、ざつか屋の店があつたので、のぞいてみました。いろ

いろなしなものを賣っています。金
物も、紙やふでも、茶わんやはしも
ありました。わらじまであります。
「まあ、さかなのひものもあるわ。
」おかあさん、みっちゃんのはくよ
うな、赤いげたもあるよ。
おくの方に、しょうゆのびんらし
いものもみえました。いなかのざっ
か屋は、ひとつの店で、ずいぶんた
くさんのしゅるいのものを賣ってい
ます。ちよつと、百貨店ひゃくかてんのようです。



ざつか屋の店をでて、しばらくいくと、赤いポストがみえます。そのよこに、小さなゆうびんきょくがありました。はいつてみると、しごとをしている人も、ふたりだけです。たろうくんは、おかあさんに、はがきを買っていただきました。

ここから、としおくんの家までは、五分くらいです。

そのばん、たろうくんは、としおくんとにいさんたちから、村の生活について、いろいろめずらしい話をききました。たろうくんは、町のことを話しました。考えてみると、とかいとうそんと、それに、りょうし町では、ずいぶん人々のくらしのしかたがちがいます。住む家も、きているきものも、いろいろなたのしみも、たいそうちがっています。けれども、もし町の人やいなかの人が、それぞ

れ、自分のしごとにせいをたすことをせず、また、たがいになすけあうということもしないならば、わたくしたちは、だれも、たのしい、べんりな生活をするにはできないでしょう。

のうそんでつくった米ややさいは、りょうし町でとれたさかなとおなじように、汽車や電車やトラックで、とかいに送られます。そして、とかいからは、きものや日用品や本やひりょうや、のうそんで使ういろんなものが送られてきます。としおくんの村にも、こんどあたらしく、本屋がでるそうです。

こうつうがさかんになり、人のゆききや物のもちほはこびがやりやすくなるにつれて、わたくしたちの生活は、いよいよべんりになってきました。そして、遠い土地の人たちも、まるで、となりきんじ

よにでも住んでいるようになってきました。
たろうくんはいま、みつこさんへ、かいがんの町と、としおくん
の村のお話を書いて、送ろうとしています。さあ、たろうくんは、
どんなことを書いているのでしょうか。みなさんは、どう思いますか。



先生、がたへ

社会科第三学年の学習指導の大きな方向は、児童に自分の住んでいる土地を手がかりとして、人がいかに自然環境に適応し、またそれを活用しているかを理解させることにあるといえます。

この本は、そのような題材を直接とりあげてみたりすることをせず、それを根拠としながら、交通運輸・生産・保健・公共施設等の諸面をとりあげてみたものであります。したがって、この本の目的は、学習指導要領補説にかかげられた主要経験領域にそい、学習指導要領の第三学年の目標である諸理解を、児童に無理なく獲得させる機会を與えることにあるともいえましょう。

いうまでもなく、この本を通読し理解することのみによって、社会科の学習がつきまわってはいません。この本の役割は、あくまでも児童の学習を側面からたすけ、有効な問題や資料を豊富に提供することにあるのであります。

主人公太郎は、都会の近郊に住む子どもであります。この主人公をめぐって展開する種々の場面を通じて、この本を読む児童は、現代の生活の諸面を理解し、とくに自分の住む土地以外の多くのことがらに觸れる機会を與えられるであります。その意味において、この本は、どのような土地に住む児童にも有効に用いられると考えられます。

この本が、児童によって、ただ一編の物語を読むように読み捨てられてしまうのではなく、できるだけ多くの機会に活用され生かされるように、先生がその配慮と努力とを願わしいと思います。

K160.3-1-2a
t.

社会科 第三学年用

た ろ う

Approved by Ministry of Education

(Date June 18, 1948)

著作権所有

著作権発行者

文

部

省

昭和二十三年六月十八日 翻刻印刷
昭和二十三年七月十五日 翻刻発行
(昭和二十三年六月十八日 文部省検査済)

定價拾四五十銭

翻刻発行
印刷者

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社
代表者 長 得一

印刷所

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社

発行所

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社

